進し。右翼隊の砲兵も猛烈にこれを援助するに勉めた爲めに、容易に退き色を見せなんだ敵兵も、見る〳〵其線上に動搖を起すに至り。これを敏くも見付けたる後歩第四十八聯隊の右翼部隊は、猛然起つて諸隊に率先して突進を企だてた。爲めに頗ぶる苦戰はしたけれども此日午後の二時二十分に於て、終に榛子嶺を占領して師團の目的を達成し得たのであつたが。此右翼隊の戰勝の因を開いたのは確かに比志島少將の僅々二門の砲兵の力であつて、此砲兵が機を逸することなく夾河南方鞍部に進出して、康家窩棚西方高地の敵を砲擊し得たのは。比志島少將の情況判斷が至當であつて、交代諸隊の歸來を待たずして右翼隊援助の爲めに急進したのが原因である。ここに於てか情況判斷なるものの當不當が、如何に戰鬪の上に大關係があるかを證することも出來るし。又砲兵が敵の不意に出て猛烈に射擊した場合には、其砲數が如何に少なくとも大效力を現はし得るといふことをも證することが出來るのであつて。此の左翼隊の右翼隊攻擊援助は頗ぶる至當に實行せられたものと評者は信ずる次第である。

其後左翼隊は夾河西北高地の敵を追ひ、更に甸脚溝に停止したる敵を攻擊したが日沒前後には此敵も退却したので。ここに後備第一師團は豫定の如く、千合嶺より榛子嶺、夾河を經て小嶺子に至る線を占領して、此日の戰鬪を芽出度終結して。左翼隊が水洞及哈叭嶺に殘置したる諸隊も、前田支隊との交代を了りて午後五時前後までに何れも比志島少將のもとに歸還した。此戰は前にもいふ如く極めて微々たる小戰であつたが、エック中將の左右兩前衛を灣柳河、富家樓子の方へ驅逐して、後備第一師團の清河城に向ふ將來に對する運動を容易にしたと共に、敵の手なみが如何なる程度のものであるかを試檢した樣なもので。後備師團の爲めには非常に得る所が多かつたのは事實であつた。

此際露軍に於ては如何なる配備にあつたかといふと、アレクセエフ中將の率ゆる清河城支隊は、此の戰鬪の直前二月十八日には三隊に分れて居て。リ

ユバウキン少將の部隊は高力營子附近に、マスロフ少將の部隊は興京廳附近に、エック中將の部隊は清河城附近に居たのであるが。其エック中將の金斗峪から灣柳河の方に出した歩兵二大隊、騎兵五中隊の左前衛と、富家樓子及び水洞の方に出したる歩兵一大隊、騎兵五中隊の右前衛とを、我が後備第一師團は驅逐したのであつたが。露軍に於ては頑强に此の兩日に戰鬪したる陣地を防守するの考はなかつたのであるから、左前衛は灣柳河に退ぞき右前衛は富家樓子附近に止まつて我と對峙したのであつた。

而して此のエック中將の隊に於ては、二月十八日までに於て得たる諸種の情報によつて其前面にある日軍の、後備歩兵四箇聯隊であることを知つて居て、其隊號までも探知し得たのであつたが。それにも係はらずして露軍總司令部の方では、非常に此の清河城方面の日本軍にのみ懸念して、愈〻明朝實施といふ所まで漕ぎつけて居た第二軍の攻擊を、此の清河城方面の日軍の果して我が乃木軍であるかどうかが、明瞭に知れぬといふのを口實にして豫備隊の請求を峻拒して、爲めに全く中止するに至らしめたのは實に理由がわからぬと評者は思ふ。

が併し露軍に於ては其總軍司令部の諜報係のウハヂ、オゴロウキツチ少將が、たしか二月の中旬頃であつたと思ふ一支那間諜からして左の如き情報を得た。

『日本軍ノ一部ハ遼陽西北ニ集合遼河々盂ニ向ツテ前進シ大迂回ヲ以テ露軍ノ左側背ニ迫ラントシツツアリ』

といふ最も有力なる情報を齎らし來たつたのであつたが。ウハヂ少將は其以前に既に其胸中に於て清河城方向に襲來したる日軍を以て、其兵隊が後備であるといふエック中將の報告を知つて居りながら。それでも何でもこれを以て乃木軍に相違ないと獨斷できめて居たので。此樣な有益なる諜報を持つて來た間諜を非常に酷遇して、全く其情報を以て彼れ間諜の虛構をしたものとして。これを阿房拂ひにしたのみか最初に約束した金額をも、命ちがけて大有力の情報を持つて歸つた間諜に鐚一文も與へなんだのであつた。

彼れ支那間諜どもは唯々金の爲めに働らいて居るのである、然るにそれが一生懸命で有力なる確報を持つて歸つたに關せずウハヂ少將の胸中に考へて居る所と一致しなかつた爲めに、彼れの折角の骨折りが全然水泡になつたと聞いた、此の少將配下の間諜どもは一同申し合せた樣に、日本軍が遼河の方へ迂回するといふことに付ては、聞いても見ても少しもそれを報告せぬ樣にして、此の少將の御機嫌を損せぬ樣に勉めたので、ここに眞實の重要なる諜報は全くウハヂ少將の手には入らぬことになつた。それで此の御機嫌に叶ふ樣な報告は、常に乃木軍が清河城の方から迂回した樣に考られるものばかりで、これを聞くと同時に同少將はこれ全く我意に合するとして、それを頻りに總軍司令官へ具出したので。クロパトキン大將始め多くの露軍の將軍達は全く乃木軍の遼河々盂から出て來やうとは夢にも思はなんだのであつたが。これは大切な諜報係のウハヂ少將が自己の胸中に一成案を懷いて、それに吻合せざる報告を排斥した爲めに、全く諜報が眞實を傳へることをせぬ樣になり、日本軍の行動が殆んど露軍には知れぬことになつて仕舞たのであつて、これ實に諜報等に關係する人々の、大に注意せざるべからざる所であつて。軍事上の智識の缺乏したる支那人の諜報であるから、其間には隨分變てこなものもあるに相違ないが。其極めて怪しむべき變てこなる諜報の中に、如何なる大切な眞敵情が含まれて居るかも知れぬのであるから。自己の獨斷を以て情況を憶測して、少しでも變に思はれる情報はこれを排斥して信用せぬ樣なことをすると、忽ちにして僞の諜報のみが輻湊して仕舞樣になつて、終には全く其作戰の大計畫をこれが爲めに誤まるに至るのは目前で。此のウハヂ少將が輕率にも一間諜の重大報告を否認したのが、終に奉天會戰に先だつカウ大將の枕旦堡攻擊を中止せしめた而已か。延て終にはそれが原因で彼の大軍が殆んど潰走に陷るに至つたのは、ウハヂ少將の諜報の判斷を誤まつたのが大なる原因をなして居ると評者は思ふ。

其他アレクセエフ中將もエック中將も、其前面の敵兵をよく注意して探索

調査して見れば、大分多くの後備兵が居るのであるから。これが乃木第三軍の全部にあらずして、或は乃木軍は他の方面に向つたのではあるまいかといふことも、平靜に心を落著けて考へれば判斷の出來ぬことはないのであつたが。先づ其劈頭第一に此の阪井將軍の爲めに、二月の十九、二十の兩日に於て前哨陣地を奪はれて仕舞て。其兵勢の容易ならざると其正面の頗ぶる廣大であつた爲めに、これは非常な大兵力が此方面に向つたと信じて、これに向つて度々十二分に强硬なる偵察を行ふて、其實際の兵力と編合を探知するに勉めず。唯々我鴨軍の放つたる誇張を以て實際なりとして、連日連夜兵力の不足を訴へつつ敵の益〻增加することを而已報ずるを以て、此支隊の能事とした樣な傾向があつたので。左なきだに八割方迄乃木軍の左翼迂回を信じて居たクロパトキン大將は、全く鴨軍を乃木軍と取り違へて仕舞たのである。此のエツク中將の如きも右樣な次第から、既に戰を交へぬ以前よりして敵の兵力を過大に信じて居た爲めに。若し眞面目に敵を拒止した場合には千合嶺

ても榛子嶺でも、更に十九日の水洞附近の戰に於ても、隨分と日軍には澤山のすきがあつたに係はらず。天から敵は到底容易に抵抗し得ぬ程な優勢なものと信じて仕舞て、漸次に清河城に向つて退却するの方針を採用して、前述の各要地〳〵に於て必死に敵を拒止するの策に出てなんだ。即ちそれが爲めに日軍には澤山な過失があつたに係はらず、此の水洞榛子嶺千合嶺の陣地を放棄して、空しく安々敵手に委するに至つたのは露軍の爲めには頗ぶる遺憾千萬であつて。彼れエツク中將の兩前衞の兵力を合すれば、阪井後備師團の整備せざる兵力と決して大なる差はなかつたのであるから。此際其多數にして十中隊からある騎兵を巧みに使用して、適當に敵情を偵察すると共に千合嶺に於ても、水洞、哈叭嶺、榛子嶺に於ても、其全力を盡して敵の前進を拒止するに努力したならば。まだ〳〵立派な戰鬪が出來たのみか、十八日の夜に於ける無謀なる比志島左翼隊の夜襲の如きは、確かに立派にこれを防ぎ止め得た而已ではなく、到る所に於て日軍を例の半田中尉の後歩第七聯隊第三中隊

の樣な辛き目に遇はせることが出來たのであるのに。鴨軍の得意なる流言蜚語に聞き怯ぢして、左したる强硬なる抵抗をもなさずして、此各要地を棄て仕舞たのは確かに餘りに謙遜に過ぎた行動であつて。此の度外なる謙遜が累をなして愈〻總司令官の懸念を增さしめ、それが原因で總豫備隊をカウ大將に一兵もやらぬといふことになつたので、全然枕旦堡の攻擊が中止となつて仕舞て。愈〻清河城の方から乃木軍が來たといふので、其方へ豫備隊を出發せしめた其跡で、疾風迅雷的に乃木軍の遼河方面の大繞回が開始せられたのであつて。斯く論究してゆくといふと頗ぶる此小戰に於ける露軍の退嬰式の態度が、後に全奉天會戰を敗北に終らしむるの原因を作製したものといふことが出來る。但し此の十九、二十兩日の戰鬪に於ては、露軍はほんの前哨が我阪井後備師團に壓迫せられて退却したに過ぎぬので。大なる失態も大なる過失もなかつたけれども、其退嬰式の態度が大に日軍に利益を與へて、一方露軍の方では爲めに其手が伸びぬ樣になつて仕舞た爲めに、愈〻敵情不明に陷つて

唯々敵を優勢と而已に信ずるに至り。終には餘りに度外の過大なる報告を呈する樣になつたので、總司令官のアレクセエフ中將を信用するの度が減じて仕舞て、最も大切な遼河の河畔からレンネンカンプ中將を此の左翼の方に移すに至つて、愈〻露軍の右側は暗黑になつて仕舞たのであるが。これも彼れも要するにアレクセエフ中將の無能が致す所であつて、其原因を調へて見た場合には第一線になつて敵の主力と對戰したる、此のエック中將支隊が頭から充分なる熱心を以て敵情を偵察し、且つ其前進を死力を出して遮止せなんだのに起因するのであると評者は考へるのである。

奉天會戰の折に　無名

遙に傳騎の走せ來るを見て

つゝ音の方より駒のかけくるは

勝ちを知らする使なるらむ

大正四年三月三十一日印刷
大正四年四月　四日發行

戰史評論奥附

著作者　無名戰士

發行者　東京市麹町區平河町四丁目十一番地　宮本林治

印刷者　東京市芝區櫻川町十七番地　山田三次郎

發行所　東京市麹町區平河町　宮本武林堂
振替口座東京一〇九一二番

不許複製

戰史評論
四月豫告

清河城附近の戰鬪

如風居士著

●代金は前金を振替口座へ拂込みを乞ふ

戰史摘例

步兵操典證解

全三冊

總紙數千三百餘頁
引證戰例戰話約六百條
戰鬪實況繪畫六十葉
地圖戰圖大小五十二枚
製本本綴洋布製最美本

價一部　四圓五拾錢　每冊　壹圓五拾錢　內地郵稅　一部二十錢　每冊拾貳錢

第一卷綱領第一部　第二卷戰鬪一般ノ要領、攻擊、防禦、追擊及退却　第三卷夜戰、持久戰、山地、河川、森林、住民地ノ戰鬪、他兵種ニ對スル步兵ノ動作

我操典の條項は本書によりて頗る易解且つ耽讀手を釋く能はざる好讀物と一變し了れり、即ち其意義を講釋する爲めに、快刀亂麻を絶つ底の筆鋒を揮ひ、更に其理由を證明する爲めに內外古今多數の戰例就中日露の最新戰役を、最も多く最も適切巧妙に引用し、一々不動如山の大鐵案を下し、一見其原則のよりて生ずる所以の根原を知得せしむる而已ならず、內外有名なる戰書の尤物多數を網羅して一層讀者の興味感激を甚深ならしめんと勉めたる我日本は勿論殆ど世界萬國にも其比類を見ざる良著と稱する躊躇せず、果せる哉本書を一讀せば、當時の英國大使館武官ソマーヴィール氏、獨國大使館武官ベルネ井ツ男爵及佛國大使館武官ベルタン大尉は何れも大賛辭を贈りて、著者が多大の勞力に酬いられたり、寔に必讀の最好著なり。切に愛讀を冀ふ。

發行所　東京振替貯金口座東京一〇一九一二　東京市麹町區平河町　宮本武林堂

大正四年四月（清河城附近戰鬪　上）

戰史評論

大正
4. 6. 12
内交

宮本武林堂發行

戰史評論

成仁武夫補
無名戰士評

第二十四回　清河城附近の戰鬪　上

日支交渉頗ぶる紛糾して東洋爲めに慘怛たる風雲を釀さんとし、危機一髪殆ど國交斷絶の有樣に迫れるが爲め、其飛沫は忽ちにして四方八面に向つて意外に大なる影響を波及せしめて、又しても我が戰史評論は熱心なる讀者諸君に見みへざる約一箇月間。屆指發行の日を樂しめる多くの人々を待ちぼうけの厄に遇はしめたのは、全く以て評者の罪實に何とも彼とも謝するに一言の辭がない。乍併これとても決して〳〵補者や評者が我儘勝手を働らいて、うか〳〵と陽氣の春に浮かれ出して『百敷の大宮人はいとまあれや櫻かざして

今日も暮しつ』といふ樣に花見てくらした譯でもなければ、世間に名高い都おどりや鴨川踊りを研究に出かけた爲めでは猶更らない。いふ迄もないことであるが後ろに兵力の充實と不斷の出兵準備といふ實力がなければ、其外交は全く有名無實の形式的のものとなつて仕舞て、何等の實效をも擧げ得ないことになるのは事實であつて。東洋の天地風雲益〻急にして日支又もや事あらんとせし先月今月は、實に我々同人の間にはいふにいはれぬ大多忙大急用が二重三重になつて居たので、濟まぬ〳〵とは思ひながらも私事は何としても國家の一大事には代へられぬ。からして又々此樣な申譯ない失態を來したのであるが、その代りに一方に於ては兎にも角にも先づ國交は、曲りなりにも圓滿に解決を告げ國權の伸張を見ることとなつたので、則ちこれ罪を愛顧の讀者諸君に負ふた代りに、微細がならも國家の危機厄運に對して幾分か貢献する所があつたといふを得る次第であつて。爲に滿眸の新綠生氣滿々たる首夏の天を横さまに、不如歸々々々と血に啼きながら飛んでゆく杜鵑の初つ聲も、

これを屍山血河の血腥まぐさき間に死出の田長のそれとして聞かずして、太平無事の帝都の空細雨空濛たる曉近き天半に、極めて風流幽雅の意味を以て詩人歌人の位に素して聞くことを得るに至つた今日今曉。一方の急用多忙がやつとのことで片付くと共に忽ちにして讀者の期待に負むけるの大罪に思ひ至つて、これは大變何としたならよからふと又も吐胸をつくの窮地に陷つたのは、自業自得とはいふものの評者の境遇衷心も少しは氣の毒と推察して頂戴したいと思ふのである。が併し何れにしても評者が惡るいのはいふ迄もない、如何なる事情如何なる大變があらふとも、堅い約束に背むいて先月に出すべきものを今月に出し。其時節と殆んど同じき頃の戰鬪を研究すると廣言を吐いて置きながら、樹蔭に蟬の聲の聞こへだした今日に於て、積雪脛を沒する奉天會戰の序幕を評論するといふ矛盾千萬なことをやるに至つたのは、全く以て評者が食言の罪を犯したのであつて一言の申開きもあるべき筈はないのであるが。事實は前にも述べたる如く全く時局といふ魔者の爲めに、思

ひながら此樣な失態を來したといふ厘毛も謬りなき評者の立場に同情をして下されて、何卒〳〵此度の刊行の遲れた罪を只管容赦せられたいのである。

謝罪の爲めの前口上は百萬言を費やしても足らぬのであるが、先づ此れ位で讀者諸君の『許してやる』の一言を得たものと手前勝手に自分できめて、さてこれから愈〻三月末に於てお約束して置きましたる、清河城附近の戰鬪に就て研究の歩を進めることにするが。鴨綠江軍の當時の有樣は戰史第八卷第十一篇第四十六章一六九頁に於けるが如き狀況であつて、二月二十日の戰鬪以來別にこれといふ大なる戰況の變化を見ざりし後備第一師團は。今から後の作戰に利益あらしむる爲には、是非とも萬里堡南北兩高地を占領して師團の眼の上のたん瘤となつて居る敵兵を驅逐して。其後方の灣柳河及び其北方の金斗峪方面の敵情を、充分に搜索せねばそれといふ急場に間に合はぬことが生ずるは目前であるので、二月二十一日の夜に於て概要左の如き部署をしたのであつた。

一、歩兵二中隊、騎兵約二中隊より成る河村支隊は依然其主力を韋子峪に置き師團の右側の掩護に任ず

二、歩兵二大隊と一中隊、砲二門其他騎兵工兵の小部隊より成る草場大佐の右側支隊は明二十二日金斗峪附近の敵情を搜索し同地を占領するを勉む

三、歩兵二大隊、砲四門、機關銃四挺、工兵約一中隊及騎兵の小部隊より成る鈴木中佐の部隊は明朝萬里堡附近の敵を擊攘す

四、歩兵三大隊、砲二門、機關銃四挺及騎兵工兵の小部隊より成る比志島少將の部隊は早朝夾河に集合し其一部を以て甸脚溝西北高地の敵を驅逐し灣柳河及び英守堡子南方高地の敵情を搜索す

五、豫備隊即ち歩兵二大隊、砲四門、機關銃四挺、騎兵半中隊、工兵二小隊は明朝双臺子附近に集合す

後備第一師團長阪井中將が、近き將來に於て敵と戰ふ爲めに利益ある如くし樣として、前述の如き處置をするに決したのは實に適當なることであつて。

既に榛子嶺から小嶺子に亘る間を占領して居ても、其近き前面の萬里堡から甸脚溝に敵が頑張つて居るのであるから、少しも敵情を知ることが出來ず隨て爾後の行動に就ての見當がつかぬ。その上其北側の金斗峪に若しも敵が居るとして見ると、前面の敵を擊退して清河城方面へ進出するのに頗ぶる不便であるから。此の甸脚溝と萬里堡と金斗峪との敵を驅逐して、以て敵情地形を明らかにして作戰の計畫を立てるに便利にし樣としたのは、機宜に適した る最も至當の處置であると評者は考へるのであるが。併し其實施に就ては少しく意見がないでもないから、これから其實行方法に就て聊か評論を試みることにし樣と思ふ。

阪井中將が豫想した樣な大なる敵も居らず、且つ葦子峪の河村支隊から兼て千合嶺に若干の歩、騎兵が出してあつたのと、二十二日早朝杉松排子から金斗峪南方高地へ先遣せしめた歩兵一中隊の掩護とにより。後歩第六旅團長草場大佐の部隊は何の苦もなく同日午後四時に金斗峪を占領して、其目的の大部分を達し得て、馬圈子及び灣柳河方面の敵情を搜索したが。此の草場大佐が自己の主力部隊は松樹口附近に集合して午前九時過ぎに緩々悠々として出發しながら。其日の早朝に後歩第二十三聯隊の第八中隊を、孤立して杉松排子から金斗峪南方高地に派遣したのは頗ぶる適當でない。千合嶺には既に若干の味方が葦子峪の河村支隊から出て居るのであるから、金斗峪には敵が居らぬといふことが知れて居たかも知れぬが、阪井中將が態々旅團長を派遣した所を見ると決して敵情は明らかでなかつたに違ない。よしやそれが知れて居ても時々刻々に變化するのは敵情であるから、決して油斷してかかるべきものでない上に、師團の命令には金斗峪の略取を勉めよとあるのを見ても、相當に此金斗峪の占領を重く見て居るのは明らかである。然るに安閑と其主力を松樹口に午前九時に集合せしめて、それから出發するといふ樣な極めて緩漫なる態度であるに關はらず、僅々一中隊を遠く孤立して敵の直き傍まで前遣したのは何の爲めであるか、其主意のある所を知るに苦しむのは決して

評者而已てはあるまい。若し萬一にも此所に敵の有力なる否々一大隊位のものが居つたとしたならば、此の後歩第二十三聯隊第八中隊は如何なる憂き目にあひ如何なる大敗をとつたかも知れぬ。千合嶺に若干の味方が居つたとしてもそれは一中隊以下の小部隊である、少しく纒まつたる敵が勝に乘じて第八中隊を追擊して來たならば、一たまりもなく共に潰走に陷るべきは理の當然である。二、三時間も先に遠く敵方に出したる味方の、孤立援なき第八中隊が敵から散々に打ちなされて四分五裂の有様で、今や金斗峪を占領せんとして出發して間もない主力の先頭へ、凄まじい大雪崩れの如く滔々たる大洪水の如く、なだれかかつて來たとしたならば何とする。思ふに此草場右側支隊は目的の金斗峪の略取を勉むる所の沙汰ではなく、千合嶺か又は杉松排子附近て、此の味方を收容して辛ふじて敵の前進を喰ひ止める位が關の山てあらふ。斯くなつたならば後備師團は爲めに其右側を脅かされて、爾後の運動に非常に困難千萬になるのはいふ迄もないと評者は信ずるのてある。からして

此樣な場合には早朝可成速に松樹口に集合して、午前の七時か八時に出發してつまらぬ奇兵を用ひずして、正々堂々と當り前の警戒法を取つて搜索を嚴にして前進するがよいのてあつて。幸に敵が大した抵抗もしなんだからよい樣なものの萬一大敵といふ程てなくても、歩兵の一大隊かそこらも居つた場合には必ず評者の想像した樣な危險に出會したに相違なく、左すれば其目的は容易に達成し得なんだにきまつて居ると自分は考へるのてある。て此の草場大佐の處置は餘りに敵を輕侮し、徒らに奇を好むて求めて戰術の原則に背いたやり方をしたと評するが至當てあると評者は思ふ、これ實に油斷てある驕怠てある、驕もの久しからずこれが抑敗軍の第一歩てある愼しまざるべけんや。

鈴木中佐の部隊は榛子嶺上に手間をかけて昨日から準備したる陣地に、後備砲兵第二中隊の四門に放列を布かしめ。さて其部下を第一大隊長たる小原少佐に第二、第四、第六中隊の三中隊を指揮して、本道北側の高地から前進せし

めて。第五、第七、第八中隊を第二大隊長林少佐に指揮せしめ、第五中隊は本道を其他は本道南側の高地を前進せしめて、第一、第三中隊を聯隊の豫備として自分が握つた樣であるが。評者は此の軍隊の部署は極めて至當でないと思ふ。此の場合鈴木中佐は何故に兩大隊から一中隊づつを取つて豫備とせなんだのであるか、左すれば兩大隊長は何れも自己の部下の三中隊を指揮して戰鬪することになるのである、それを何ぞや何等の理由もないのに第一大隊の二中隊を自分の豫備に控置して、其兵力が不足したので第二大隊の一中隊を之に加へたのは極めて拙ない又極めて理由がない。戰鬪酣なる場合急に應ずる爲めにしたのなればまだしも、現に前夜から命令が下つて豫め充分に準備した攻擊動作に於て、此の樣な不合理なる部署をするといふのは最も其意を得ぬと評者は思ふ。此の樣な建制を無視した部署をするものであるから、最も有利なる本道北側を始終瞰制の位置に立つて高地を傳ふて進んで、本道南側の敵の眞つ左側面に出る樣な最好位置を占めながら、容易ならざる苦戰をして大隊長傷つき中隊長戰死するといふ樣な始末に至つたのである。此の建制無視の部署の外には別に其攻擊方法には異存はなく、先づ〳〵適當に實行せられたものと思ふが。評者が事後から考へる所の一方案をいふて見ると、次に述べるが如くしたならば今少し有利に目的を達し得られたであらふと思ふ。

即ち本道及び本道南側高地には、歩兵三中隊と機關銃二挺を林少佐に指揮せしめて徐々に攻進せしめ。又本道北側高地には小原少佐に歩兵二中隊を指揮して、萬里堡東方高地を占領して敵の側面を猛射せしむる如く運動せしめて。鈴木中佐自身は兩大隊より控置せる歩兵三中隊、機關銃二挺を提さげて、臺溝方面から本道北側高地を迂回して、北溝方面の敵の右側へ猛烈に迫つたならば敵は非常に狼狽したに相違なく、左すれば小原大隊も此日の樣に苦戰をする必要はなかつたと思ふ。斯くして鈴木中佐の迂回中に萬一にも敵が攻勢に轉じたとしてからが、歩兵五中隊、機關銃二挺が瞰制に便利なる兩側の高地を占めたる上に、四門の砲兵によつて縱射せらるべき本道附近からは、三、

四倍の敵でも容易に攻進することは出來ぬ。まして況んや鈴木中佐が判斷する所では三大隊といふのであるから、それ位の敵は充分に喰ひ止めることが出來て少しも危險はないと思ふ。て此正面の主力の方には迂回の成功までは餘りに急進せしめずして、愈〻迂回が成功して敵が左顧動搖を始めた時機をはづさず、猛烈果敢に攻擊前進を始めさしたならば敵は一支もなく潰走したに相違あるまいと思ふ。現在此地に居た敵の退却を始たのも、鈴木中佐が其豫備隊なる第一中隊を敵の左翼に迂回せしめて、それが不充分ながらも灣柳河東方の高地上に進出したのが動機となつて、敵線忽ち動搖し始めたのは事實であるから。これが今一層敵の左側に出てたる上に其兵力が多かつたならば、敵は非常に狼狽して潰亂して退却するに至つたであらふと思はれる。がこれは事後から評者が机の上で考へた考案であるから、實戰に於ては現在鈴木中佐の處置した位にゆけば、先づ〳〵上出來といふべきであらふと思ふが。それにしても前に述べたる建制を無視した拙ない部署は、どこ〳〵までも評者

は不同意を唱へるに躊躇せぬのである。

師團の豫備隊が双臺子に集合して居つたのは適當である、此所からは小堡へも金斗峪へも細いながら赴援するに足るべき山逕がある上に、本道及び夾河の比志島少將の方へは立派な道が通じて居るから、山地に於ける戰鬪の總豫備隊の位置としては最も適當である。又鈴木部隊の戰鬪を危ふんで午後二時康家窩棚へ前進したのも申分はないと思ふ、且つ其控置したる兵力に就ても評者は先づ適當であると考へるのである。

更に比志島少將部隊の方面は如何にあつたかといふと、其命令にも早朝夾河附近に集合して、其一部を以て甸脚溝の敵を擊退して英守堡子南方高地の敵情を探れとある通り。比志島少將は後步第三十六聯隊長橋本中佐に步兵一大隊を率ゐしめて、此の敵情偵察と敵兵驅逐の任務を負はせたが、これは先づ此の場合最も適當な處置であつたと思ふ。然るに此の橋本中佐は其第一大隊長たる富田春壁少佐に命じて、前面即ち甸脚溝の敵の兵力を偵察せしめて

見た所が、それが極めて小部隊であることを報告して來たので、輕はづみにも第三中隊一箇中隊を派遣してこれを驅逐せんとしたのであつたが。豈に計らんや敵は第三中隊よりも優勢で約二中隊程も居た上に、灣柳河附近の砲兵も忽ち之に加勢をしたので、此中隊は敵を驅逐する所の沙汰ではない、自分があべこべに驅逐せられる樣な羽目になつて、敵前の不利なる位置に停止するに至つたのは。頗ぶる此方面の戰鬪の進捗を害したるのみか、逐次に兵力を增加するといふ過失に陷つて、相當に大なる兵力を持ちながら終に敵の爲めに其前進を阻碍せられたのは殘念であつた。最も此方面には最初富田少佐が偵察をした時分には、事實極めて少數な敵しか居らなんだのは決して嘘ではない事實であるが。其後に至つて敵のザラゴサラゴフスキー大佐が鈴木部隊の左側を衝くの目的で、此方面から攻進して來た爲めに急に兵力が增加した、然るに其樣な敵方の計畫の知れ樣筈がない所から、第三中隊一箇中隊を以て之を驅逐せしめんとしたので終に攻擊停滯を來すに至つたので、强ち橋

本中佐のやり方が惡るいとはいへぬけれども、師團の命令は比志島部隊の一部を以て敵を驅逐して、英守堡子南方高地の敵情を探れといふのであつて。それに任ぜられたのは橋本後備聯隊の第一、第二、第三中隊と第七中隊、即ち實力步兵一大隊であつたのであるから。更に此の一大隊の一部を以て敵を驅逐せしめる計畫をしたのは、餘りに敵を侮り過ぎた處置であると評者は思ふ。何れにしても到底一中隊の兵力を以て英守堡子南方高地までの敵情を搜索することの出來ぬことは、知者を俟たずして明白に知れる事柄である以上は。よしや敵の小部隊しか甸脚溝の東南高地には居らぬとしても、充分に此の四箇中隊を以て準備を整へて、優勢なる兵力を以て敵の小部隊を驅逐即ち烈しく急追して、彼が非常に狼狽周章して潰走するのを見て、敵の主力が是非ともこれを收容する爲めに全力を現出せざるを得ぬ樣にしむけて、此方面の敵情を偵察するのが至當であつて。斯くすれば若しや豫想外の敵の兵力が何れかに貯へて有つた場合にも、少しも自分の目的遂行の爲めに困難を來す樣な

ことにはならぬのである。然るに橋本中佐が輕率にも富田少佐の報告を信じて、何れは使用せねばならぬ所の兵力を出し吝しんで、第三中隊のみに敵兵驅逐の責任を負はして、其他を安閑と遊ばせて置いた爲めに。其ほんの僅少の間に敵情に大變化を來して、第三中隊は數倍以上の敵と相衝突して忽ち停止せざるを得ざるに至り、又一中隊更に一中隊とあとから〳〵兵力の逐次增加をやつたので、終に敵の銃砲火の爲めに閉息せしめられるに至つたのは、これ全く橋本中佐の處置其當を得ざりしの致す所に相違ないので、此樣な場合に兵力の出し吝しみをするといふのは實に愚の至りである。これありしが爲めに此方面は此日全く充分に敵情を知ることが出來ずに仕舞たのは、誠に遺憾千萬なことであつたと評者は思ふ。

評者の考へる所に依ると、此方面で最も敵を瞰制して且つ全般の狀況を偵察するに便利なる土地は、夾河の西から西北方に向つて延長したる嶮峻なる高地脈であつて、これに有力なる兵を進めて其左右兩方面を斜射せしめて、

常に敵の心中に不安を抱かしめる樣にして。正面即ち橋本中佐の進んだ方から正々と攻擊していつたならば、土地が嶮岨でも雪が深くても又は多少の敵が據つて居ても、大なる障碍をなし得る筈はないのであると思ふのである。現に此場合も此山脈上には第十一師團と聯絡して我左側を警戒する爲めに、橋本聯隊の第四中隊が派遣してあつたのであるが、此の中隊も頻りと砲火や銃火を恐れて前進を躊躇し、又橋本聯隊の方でも此中隊をして敵の右側背を脅かさしむるといふ考が毛頭なかつたので、此樣な好瞰制地を敵に先だつて占領して居りながら、少しも其效能を發揮し得なんだのは殘念であるが。併し敵の方の戰史では此方面に攻進して來た部隊は、鈴木部隊の左側を脅かさんとして甸脚溝に壓迫を加へて、却つて我が軍の方から其右翼を迂回されて、退却せねばならぬ樣になつて仕舞たと記述してある所を見ると。此の後歩第三十六聯隊第四中隊の行動は、敵には味方の思ふたよりは大なる痛痒を感じさして居るのであるから。若しこれを今少し有力なるものにしたならば、尙

一層の效能が顯著であつて又其戰鬪も思ふにずつと捗どつたことであつたらふと思ふ。其後趙家甸子から敵の一部隊が夾河の左側背に向つて運動する當つて、第五、第七兩中隊を此の高地に出して西面してこれを占領せしめて、第十一師團との聯絡を確實にすると共に、其敵の前進を拒止したのは極めて適當なる動作であつたが、若しも評者のいふた如くに最初から此高地脈に、これだけ位の兵力を使用したならば敵の右前衞は無謀な前進を企だて得ずして、我は却て彼の甸脚溝東南の敵に、もつと早くに退却を餘儀なくせしめ得たであらふと思ふ。何れにしても此方面は敵に命令するといふやり方でなくして、常に敵の命令に應ずる樣になつて後手〳〵で、眞のごて〳〵に終つたのは殘念の至りといふの外はないのであつて。此の橋本聯隊の敵情偵察の充分に出來なんだことは、翌二十三日の戰鬪にも少なからざる影響を及ぼして居るのである。

此の日に於ける後備第一師團の小言は先づこれ位で切りあげて、さて今から

らは其左翼に少し後退して相連繫して居た、第十一師團の此日に於ける戰鬪に就て評論をして見樣と思ふが。何分にも此の第十一師團はまだ其一部は追及中にあつて、其兵力の集中が終らぬ上に其各部隊も其缺員の補充が終つて居らぬのであるから。大分に其動作の上にこれが妨害をなして居るのは言ふ迄もないことである。

甸脚溝以南の方面では何れの方向も敵の方から反對に、自分の仕樣と思ふたことを先を越されてやられた爲に、それを防ぎ止めるのに全力を盡すといふ日に陷り。其中に日沒になつて結局英守堡子南方高地の敵情は殆んど搜索する能はずして、却て敵の爲め夾河北方及び西方の味方の狀況を偵察されて仕舞たといふ、極々拙ない戰鬪を交へて居たる場合。其左翼に連繫して居た第十一師團の前田支隊は如何なることをして居たかといふと、此の前田隆禮少將の部隊は二十一日以來此方面の警戒に任じて、右は小嶺子附近に於て比志島少將の部隊と連絡して、小高力營子から哈叭嶺を經て達子嶺に至る間を

占領して居たが。其兵力が歩兵一聯隊騎兵一中隊、砲兵一大隊、機關銃四挺、工兵半中隊といふ微弱極まるものであつたのと、其他の師團の殘餘は遠く後方にあつて、現に鮫島師團長は泡子沿に居つた樣な次第であるから、此日は依然此の線を守備して何等の企圖も抱いて居らなんだのであつた。

然るに敵は二十二日午前の七時半と覺しき頃から、先づ趙家甸子方面の露軍が活動を始めて。趙家甸子の村落から我が守備する小高力英子を烈しく射擊し出した、と思ふ中に約二中隊程の敵は此趙家甸子東方高地を傳ふて、ずん〳〵小嶺子の方に向はん氣勢を示しつつ、此高地からも盛んに小高力英子に射擊を集めるといふ有樣。此方面の守備に任じて居た歩兵第四十三聯隊の第一大隊長渡邊小太郎少佐は、第一、第四中隊を小高力英子南方高地に配布して之と應戰し。小癪千萬にも我が第十一師團の右翼に迂回せんとする敵を抑へんとして、第三中隊の一小隊を小嶺子の東方高地に前進せしめて。趙家甸子東方高地から小高力英子を威嚇しつつある敵の左側に、烈しく側射を加へてやつたので、敵も前進は停止したけれども元來此方面の味方の兵力が少ないのを侮どつて。午前十時前後になると東部富家樓子の北方高地に砲兵を出して、此の砲兵を以て趙家甸子方面の露軍に聲援を與へる爲めに、十數發の射擊を小高力英子に向つて行なはしめて、之を合圖に此方面の敵は益〻前進して今や正に攻擊に轉ぜんとする模樣を見せたので。渡邊少佐が油斷なく之に應ずる準備をして居ると、正午頃になつてから極て少數なる敵が、散開して小高力英子の北方太子河の線まで進んで來たが。それと殆んど同時に西方流晌哨の北端に敵砲二門現出して、渡邊大隊の第一、第四兩中隊の陣地を側方から射擊したが。其やり方が餘りに悠長緩漫であつたのと、計畫の極て雄大なるに反して其兵力が頗ぶる微弱で少しもそれに對平せぬので、これは全く我が情況を探らんとする手段であると判斷したる渡邊少佐は。其第一線の二中隊を以て猛射を浴びせて之を擊退し、豫備隊にある第三中隊の二小隊をして追擊を決行せしめて。遠く太子河を徒渉して趙家甸子を占領し、折から圍山

子方面を退却する敵に向つて、猛烈極まる射撃を加へてやつたのは、先づ以て痛快なるやり方であつたと稱してよからふ。

此二十二日の早朝から敵は單に小高力英子の方面ばかりでなく、流晌哨からも又哈叭嶺にも達子嶺にも何れも攻撃を試みては來たが。それが何れも比較的其兵力が多くなかつたので、馬家城子に集合して居た前田支隊の豫備隊から時機を失なはず、それ〴〵應援を其方面の守備線に加へて、これを撃退したけれどもそれが何れも。本氣でやつた攻撃でないのは、其兵力と其やり方で明白に知ることが出來たのであつたが。元來此日は何等の活動をもせぬといふ豫定であつた第十一師團のことであるから、此前田支隊は敵が各方面とも退却すると共に、趙家甸子迄進出して居た歩の第四十三聯隊第三中隊を一先づ小高力英子迄後退せしめて。依然昨日來の守備線を警戒して此の夜を過ごすことにして、其間に於て主力は漸次其兵力を前方に開進集結することに熱心に盡力したのであつた。

後備師團も第十一師團も以上の如き小戰鬪を諸方面で交へた而已で、我軍に於ては大なる戰況の發展を見ずして此の二十二日は暮れて仕舞たのであるが。此日露軍の方では如何なる都合であつたかといふと、二十日の戰鬪終つて後は日本軍の運動が非常に不活潑千萬になつたので不思議に思ふて居る所へ、敵の第一軍司令官たるリネウヰチ大將からは左の如き訓令が到著した

『敵若シ退却セバ直ニ之ヲ急追シ其砲熕ヲ鹵獲スルヲ勉メ敵ヲシテ再ビ此方面ヲ窺フ能ハザル如キ大打撃ヲ與フベシ』

といふ意味の頗ぶる雄壯を極めたる文言であつて、此訓令を發するに至つたる原因を調べて見るとリネウヰチ大將は最初から、此の清河城方面の日本軍はつまり牽制にやつて來たのであるから、其兵力も決して莫大なるものにあらずして不日必ず退却するに相違ないと判斷した。然るに二十日以來非常に日本軍の運動が緩漫を極めたので、これ全く敵がそろ〳〵退却運動を開始したのだと考へたものであるから、右樣な勢のよい訓令を出したのであつて。

二十日の戰に於ける此方面の日本軍は歩兵八大隊、砲十二門といふアレクセエフ中將の報告を得て、愈〻同大將は自己の判斷の誤まらざるを確信して。アレクセエフ中將の請求の通りに其馬群鄂に居た諸隊を清河城に急赴增援させて、さてこそ右の樣なる頗ぶる雄壯なる訓令を出したのであつたが。此リネウキチ大將の敵情判斷は全然正鵠には中つて居らぬが、併しながら中らずと雖ども遠からずて先づ〳〵適當なる判斷の下し方であつた。若しクロパトキン大將が奉天會戰の最終迄此れと同樣な判斷を確かに持續して居たならば、奉天會戰の勝敗は容易に其決著がつかなんだに相違ないといつても評者は思ふのである。

以上の樣な訓令を受けた上に、馬群鄂に居た露軍諸隊は二十一日の朝何れも望城崗子附近へ著したけれども、日本軍の方では全く沈默を守つて少しも露軍に迫る模樣がないので、アレクセエフ中將は或は日本軍が退却を始めて居るのではないかと疑ひ出した。萬一軍司令官の彼の樣な訓令があつたのに係はらず、うつかり油斷をして居て敵に知らぬ間に退却されて仕舞たとあつては、それこそ實に一大事といふ所から昨二十一日の夜に於て、翌二十二日に威力を以て敵情を偵察するの計畫を定めた。即ち其梗概を列擧して見るとせしむ

一、灣柳河にある左前衞をして萬里堡南北の高地に據つて敵の前進を拒止

二、ザラコザラゴフスキー大佐に歩兵一大隊、砲二門を率ゐしめて東部富家樓子方向より榛子嶺に迫り左前衞に對する敵の左翼を包圍せしむ

三、右前衞をして趙家甸子を經て水洞に向つて前進せしむ

四、シロコフ大佐に歩兵二大隊、砲四門を率ゐしめ望城崗子より遠く敵の左側背を迂回し北甸子及南甸子に出て水洞の敵の背後を衝かしむ

アレクセエフ中將の威力偵察は此樣に大分大仕掛けなものであつたが、不思議にも此の二十二日には我日本軍に於ても其後備師團は敵情の威力偵察をやつたので。此の日は北の方では威力偵察の鉢合せが始まつたのであつて、

一向に花々しい面白い戰鬪も起らなんだのであつたが。敵の此の頗ぶる大膽至極なる威力偵察も天候と地形と積雪と嚴寒との爲めに、其運動が少しも思ふ樣にゆかずして、徒らに時間を空しく浪費して居る間に。我が鈴木部隊の左翼に迫る考のザラコ大佐の部隊は夾河西方高地から進んだ所の、我が後歩第三十六聯隊の一部の爲めに却て其右翼を迂回されて三家子南方高地に退ぞき。右前衞も歩兵第四十三聯隊の渡邊大隊に其右側背を壓迫されて東部富家樓子に退ぞき、又左前衞も萬里堡南北の高地を棄てて清河城東方に退却して仕舞い。最も大膽に最も我日軍に痛痒を感ぜしめ得る位置に進んだシロコフ大佐は、今少しく遠く迂回して鍋成石から達子嶺、菜子窰溝といふ風に、我が前田支隊の左側を衝く樣に運動すればよかつたのに。これも種々なる運動を妨碍する原因の多かつた爲めに、午前九時頃から哈叭嶺に向つて攻擊を開始したので、前田支隊は此樣な攻擊は少しも痛くも痒くもない。直ちに馬家城子から哈叭嶺に兵力を增加して此攻擊を喰ひ止めたので、露軍に於ても我軍

同樣何等大なる得物にあり付かずして、此前面の敵を歩兵十二大隊、砲二十門と判斷し。閏家嶺方面には尙ほ有力なる部隊があるものと考へて、清河城陣地に據つて之を防禦するといふことに決心をした。此の判斷と決心は實に相當に的中して居る而已か、此日の威力偵察は隨分と思ひ切つたやり方であつたが、シロコフ大佐が今一奮發して南北甸子迄踏み込んでくれたならば、大に我日本軍を狼狽せしめ得たのに惜しいことをしたものであつた。て兩軍ともに先づ相當に互に敵情の偵察をなし得て、此夜は相對して交々戰を休んだが翌二十三日には露軍は清河城陣地を堅守するの決心で、其準備を油斷なく進行せしめ。これに反して日軍は翌日の攻擊準備の爲めに、此夜大に活動をしたのであつた。

軍司令官川村大將は其軍を集中せしめて居る間に、種々なる手段を盡して諸方で敵情を偵察さして居たが。前面の露軍は英守堡子附近から三家子を經て、西部富家樓子西方標高三四六高地附近に亘つて陣地を占めて居るものの

如きを知つて。即ちこれを二月の二十三日を期して攻撃せんとして、二十一日午後十一時に於て概要左の如き要領の命令を下したのである。

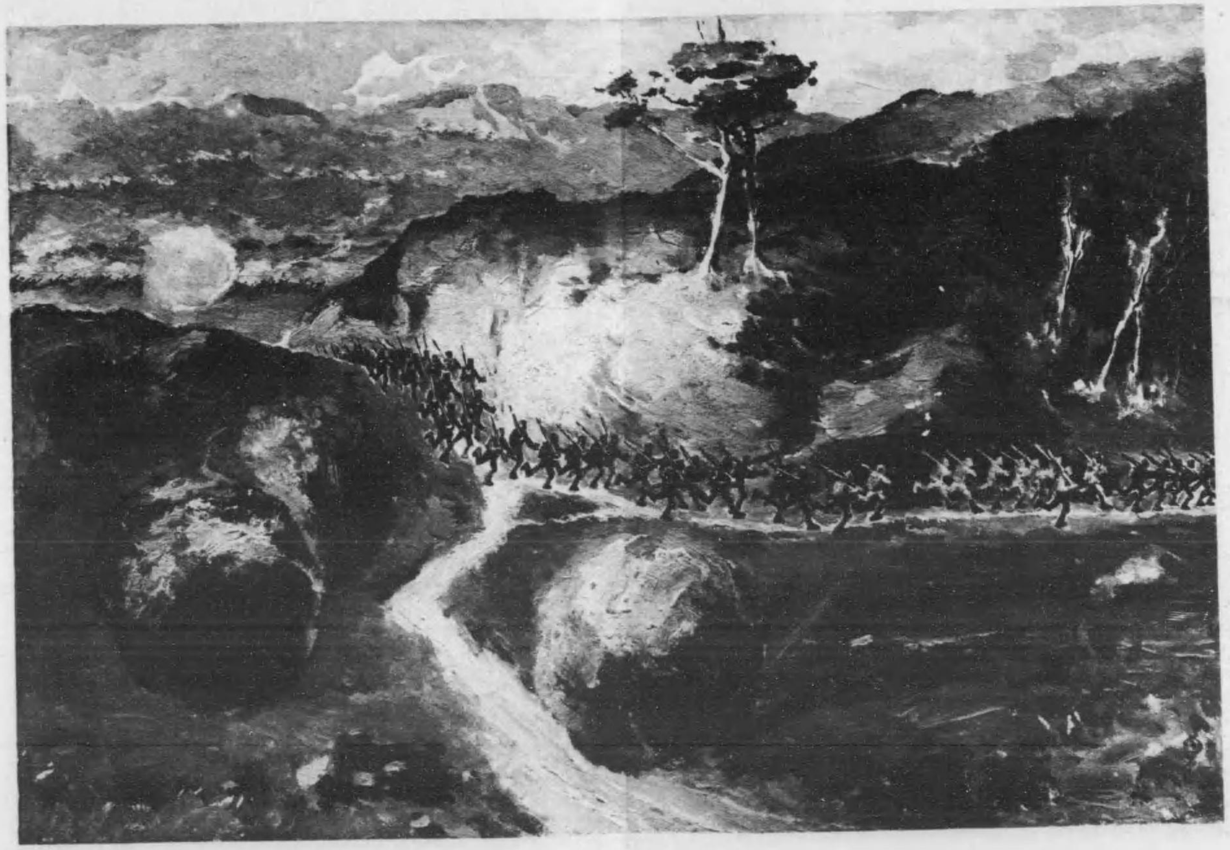
一、第十一師團ハ二十三日午前七時第一線ヲ太子河向岸ニ渡シ西部富家樓子西方標高三四六鞍部附近ノ敵ヲ攻撃スベシ

二、後備第一師團ハ二十三日第十一師團ニ連繫シテ運動ヲ始メ康家窩棚附近ヨリ敵ノ左側ニ迫リ英守堡子附近ヲ攻撃スベシ但シ河村支隊ノ外一部隊ヲ金斗峪附近ニ派遣シテ軍ノ右側ヲ掩護スベシ

三、總豫備隊ハ二十三日早朝城廓ヲ出發シ午前十時南臺ニ至ルベシ

此命令中第十一師團に命じたる任務は頗ぶる漠然たるものであるが、敵情も多分頗ぶる不明であつたことであらふから致方がなかつたのであらふ、がそれにしても標高三四六鞍部附近と、あて推量に攻撃の目標を的確に示したのは、餘りに其さし示し方が無責任に過ぎはしなかつたかといふのは。何等標高三四六の附近に敵が據守するといふ諜報もなければ、又偵察の結果これを

清河城ノ戰



九十九道人石原白道畫

知り得た次第でもないのであるから。此の樣に如何にも其所に敵の大部隊でも居る樣に示すのは至當であるまいと評者は思ふ。まだ〳〵此樣な無理な示し方をせずとも師團に任務を與へるのであるから、幾らでも適當な示し方の穩當なる方法があると考られるのである。後備師團に課した任務の命じ方なればさして申分はない、これなれば萬一敵が其示した點に居らずとも、充分に他の方面に向ふことの出來る應用の餘地があるが。標高何々附近とまて細かに示すのは餘りに其敵の位置の漠たるに對しては、明白に過ぎると自分は思はずには居られぬのである。又第十一師團には午前七時に於て其第一線に太子河を越へるといふことを命じて置きながら、後備第一師團には第十一師團に連繫して運動するといふことを示した而已で、時間を以て其運動の開始が命じてないので何となく評者はのことでないのであるから何時何所を出發して、何地へ攻進せよと命令する方が至當であると評者は思ふ。

前掲の命令を受領したる阪井後備第一師團長は、二十二日に於て大要左の如き部署をなした、即ち

一、片倉中佐の率ゆる歩兵一大隊、砲二門、機關銃四挺に若干の騎、工兵を加へたる右側支隊は金斗峪附近に位置し永陵街及馬圈子方向に對して軍の右側を掩護す

二、比志島少將の率ゆる歩兵四大隊、砲八門、騎兵若干、工兵一中隊は午前八時萬里堡より甸脚溝に亘る線を出發し灣柳河西北高地より英守堡子附近に亘る線を略取す

三、橋本中佐の率ゆる歩兵一大隊、砲二門、機關銃四挺及び騎、工の若干は午前八時夾河を出發し甸脚溝西北高地を略取す

四、豫備隊は午前八時三十分康家窩棚に集合す

以上の外河村支隊は依然葦子峪にあり、軍の右側背を警戒して居るのは今までの通りである。昨日の戰鬪を中途で止めて其位置で警戒配備を取つて居た後備第一師團としては、先づ此樣な部署をする外には詮方がなかつたであらふ。が此所で一つ好んで難癖を付ける樣で心苦しいが、評者の考を述べて見たいと思ふことは。比志島少將の部隊には灣柳河から英守堡子北方の高地を略取せしめて、橋本中佐には甸脚溝西北高地を略取することを命じてあるが、此の橋本中佐の隊は歩兵一大隊、砲二門といふ極めて微弱なものである然るにそれが命令の如く運動すれば非常に師團の主力と遠隔して、孤立して戰鬪を交へる樣な危險な位置に立ち易いと思ふ。であるから此樣に部署して軍隊の區分をする考ならば、今少し此橋本中佐の隊の兵力を多くするか、左なくばこれを全くの左側警戒支隊として、此方面の敵を監視せしむると共に第十一師團と連絡せしむるを任務として、それに陣地略取等の重大なる任務を授けぬ方が適當ではあるまいかと思ふ。現在後に後備師團は其正面前に二千餘米突に亘る空隙が出來たが、これが即ち今評者の述べた理由に注意せずして命令したに基くと思ふのである。自分の考は間違かも知れぬが自分は何

としても橋本部隊の樣な小なるものを孤立せしめて、それに相當なる重任を負擔せしむるといふのは無理であつて、爲に頗ぶる諸方面に危險を及ぼす恐れがあると信ずるものである。さてそれはそれとしてこれからが實は清河城戰鬪の始まりであつて、昨日迄のは一寸敵情の偵察をやつた位のものであつたが。其偵察が何れの方面も充分でなかつたので、今日の攻擊がなか〳〵都合よく實施せられなんだのである。いてやこれから此の後備師團の攻擊實施に就て一、二評論を加へて後ち、更に第十一師團の戰鬪を研究することにし樣と思ふが。それより先に今一ついひたいのは、一體軍が何故に第十一師團の集中もまだ終らぬのに、非常にあせつて此二十三日に於て、清河城攻擊の命令を無理をして下したかといふと。我軍に於ては今月の末には奉天會戰を始める豫定であつて、滿洲全軍がそれの準備に汲々として居る場合であるから、敵の注意を此の新らしい鴨綠江軍進出の方面へ引きつけて、他の方面の攻勢移轉の諸準備を敵に氣どられぬ樣にすると共に、クロパトキン將軍の戰略豫備隊を巧みに此の方面に牽制し樣といふ最初からの目論見であるから。それが爲めには是非此の二十三日頃に於て清河城を攻め落さねば、あと三、四日で此の二月は仕舞なのであるから、其短時日で撫順附近まで突進して敵の大兵力を此方面に牽制することは出來ぬ樣になる。で軍でも此の日に於て攻擊を始めるのは勿論準備が不充分で好都合でないのは百も承知して居つたが、滿洲軍全作戰の計畫上如何にしてもこれを決行せねば、大山元帥の雌雄の運籌の上に齟齬を生ずるの虞があつたので、それで此の樣に急そいだ次第であつてこれ實に已むを得なんだのであつた。であるから其集中も不充分であつて又其攻擊の準備も整備して居らぬ所の、第十一師團の方を標準として比較的諸手筈の定まつて居る後備師團を、此の第十一師團の運動に連繫して戰鬪する樣に命令して。第十一師團の此の日の戰鬪をやりよい樣にしてやつたのはこれは大に軍のやり方が適當であると信ずるから、今思ひ出したまま順序は少し變てこてあるが、其事を一寸と此所で述べて置く次第である。閑話休題

愈〻これから後備第一師團の戰鬪の研究に移る。

河村支隊の方面には敵兵增加の徵があつたがさしたる變りはない、又金斗峪の右側支隊の方にも近傍には敵が居らぬといふ有樣であるから、此の方面はぬきにして今から比志島少將の部隊の行動を述べることにするが。比志島少將は二十三日の午前七時に於て、甸脚溝方面の前哨たる一大隊を除くの外の諸隊を康家窩棚に集合して、後步第十九聯隊第二大隊を前衞として聯隊長三輪中佐を其司令官たらしめ。灣柳河西北高地を目標として前進を起さしめ、自餘の諸隊は本隊となつて之れに續行し。甸脚溝の前哨たる後步第三十六の第一大隊には、自己聯隊の長たる橋本中佐の部隊が其前哨線を通つたならば前哨を撤して、灣柳河南方の隘路口に向つて前進する樣に命令して。愈〻前進を開始したが此日は朝來飛雪紛々として展望を妨げた爲めに、其前進には頗ぶる好都合であつた模樣で。敵が三家子、小甸子附近に本道をさしはさんで其兩側に堅固なる工事を施こして、我前進を大に苦しめるつもりで構へて居たのは明らかなる事實であつたが。此の滿洲の『大雪滿弓刀』ともいふべき大雪降りが我軍の前進を掩蔽してくれたものであるから、前衞たる三輪中佐は何の妨碍をも受くることなくして、灣柳河北方高地を占領し更に北溝西方高地迄進んだが。降雪愈〻甚だしくして聊かも敵情を得なんだので、輕々しく敵の術中に陷つては大變と此所に暫く其前衞を停止せしめて、必死になつて搜索に熱心に手を盡して居たが。此間に本隊は灣柳河北方高地の南麓に達して開進し、折から其前哨の任務を終つて同村南方の隘路口に到著したる後步第三十六聯隊の第一大隊を併せて。其大隊中から第一中隊を英守堡子東方の森林に出させて、此灣柳河谷地を西方に對して嚴重に警戒せしめた。

橋本中佐の部隊は此日午前八時半に夾河の附近を出發して、前哨の掩護によつて同九時四十分第二大隊の第五、第六中隊を以て、甸脚溝北方標高五二〇山上から西北に流れて居る高地の稜線を占領し、尋て敵の斥候を驅逐して英守堡子南方標高二八五の鞍部を占領し。其主力は甸脚溝附近に到著したけれ

ども、何等敵に就て知る所がなかつたのでこれも暫時ここで駐まつて搜索に手を盡したが。降りしきる大雪の爲め展望極て不自由にして、少しも敵情の偵知し得られぬといふ此場合であつたので。比志島少將も橋本中佐も、味方に都合のよい陣地を占領して、そこに一先づ停止して無我無中に暴進をする樣な血氣の勇にはやらずして、兩隊ともに手段を盡して敵情の搜索に熱中したのは至當である。此樣な場合に無闇に前進すれば如何なる敵の術中に陷るかも知れぬ、それ而已ではないこれが爲めにまだ〳〵集中の全く終了して居らぬ第十一師團も、爲めに其お相伴に預かつて仕度も整のはぬのに急進して敵と衝突せねばならぬことになる。であるから此の兩部隊が北溝北方高地と甸脚溝西方高地とを占領して一時停止して、充分に敵情を搜索したのは最も適當なる處置であつたと評者は信ずる。

金斗峪の方に派遣せられて居た草場第六旅團長は、昨夜軍隊區分が變更せられて師團の豫備隊に入るべきことになつたので、此方面一切の指揮を片倉中佐に讓り渡して、後步第四十八聯隊の第二大隊を引率して此日早朝該地を出發して榛子嶺の東方を經て康家窩棚に達し、比志島少將部隊の後方に續行して萬里堡西方高地脚に著いたのが午前十時過であつたが。丁度此時に師團の豫備隊も亦此地に到著して開進をするといふ都合であつて、先づ何等の變りなくこれまで前進して來たが。前方に進んだ兩部隊は前にも述べた通り何等の敵情をも得て居らぬので、勇敢にして謀略に富める阪井中將は、午前十一時五十分を以て左の如き訓令を兩部隊長に下した。

『比志島少將ハ小甸子東方高地ヲ略取スルヲ圖ルベシ』

『橋本中佐ハ第十一師團ト連繫シ三家子南方高地ヲ略取スルヲ圖ルベシ』

此場合敵情不明の爲め兩部隊は停止して居る、て若し此儘すてて置けば無益に大切な時間を徒費するばかりである。そこて阪井中將は敵情を偵察すると共に其戰況の進捗を促がす爲めに、兩部隊に前揭の訓令を下したのであつて。是れ實に已むを得ざるに出てたる處置とはいふものの、先づ〳〵機

宜に適したやり方であつたと思ふが此兩部隊長も師團長から催促を受けずとも、自分で今少し何とか工夫をして見ては如何であつたらふ、餘りに活用力のない樣に思はれるのは評者而已のひが目ではあるまい。但し此所で今一つ更に一言して置きたいのは此の師團命令では、橋本中佐と比志島少將とは益〻遠方に分離することになる。其後方に近く師團の主力が到著しては居るが、それでも斯く正面前の中央に空隙があつては萬事都合が惡るいので、これは實に困つたことになつたものだ。

千前一時少し前に此命令を受領する迄は、多少敵情の偵察に力を用ひぬことはないが、先づ大體に於て無爲にして化すを極め込んで居た比志島閣下も。此命令を得ると同時に後砲第一大隊の八門を、灣柳河附近本道兩側に放列を布かしめて、三家子南北兩高地を砲擊せしむる準備をなし。後步第十九聯隊第二大隊をして前陽北方高地を占領して敵情を搜らしめ、小澤中佐の後步第七聯隊の一大隊半をして其左翼に連なつて、三家子北方高地を攻取せしむる如く命令したが。此場合此命令を下したのは强ち惡るいことはないが、斯くするといふと其結果は本道と大分に離れる樣になつて、折角放列を布いた砲兵大隊の威力が、我が攻擊方面に充分に届かぬ而已か、一中隊の護衞を附したる本道附近の砲兵は、頗ぶる危險なる位置に立つことになるの虞れがある。が併し其後方には師團の豫備が控へて居るから、左まてに心配することもあるまいから、先づ此の攻進の命令はこれでよいとして置かふ。

此命令を英守堡子北方高地で受けた三輪中佐は、部下一大隊を提さげて速に前陽北方高地へ前進せんとしたが。敵が二、三中隊前陽西方高地に現はれて射擊したのと、小甸子北方から砲二門が射擊したので之れに應戰しつつ進んで見たが。容易に前進が出來ず且つ前面谷地の兩岸が急峻であつたので、遂ひに英守堡子北方高地上で立ちずくみをして仕舞た。如何にも土地も嶮峻であつたに相違なく、又敵の射擊も猛烈であつたのは事實であるのは勿論であるが。此の後步第十九聯隊第二大隊の位置からは、敵砲兵迄は三千米突以上

の距離があり、又其歩兵からは千五百米突以上二千米突もあるのであるから、少しく都合をして射撃部隊を殘して互に射撃を以て相掩護しつつ、此の谷地を通過する位のことは決して左まてに大困難ではないと思ふ。然るに砲兵が此方面にないのと左に連繫すべき後歩第七聯隊がまだ出て來ぬといふ理由を以て、明拂曉を以て此の谷地を迂回して敵を攻めんと決心したのは甚だ以て其意を得ぬ。若し本氣で此の前陽北方高地を略取するといふ考が三輪中佐の心中にあつたならば、まだ此時は午後二時前後である、今朝から何一つの仕事もせずに居た此隊は、これから此谷一つ通過する位のことは何の難作もない筈であるのであるが。惜しいことに三輪君これは少しく腰が弱すぎた、砲兵や第七聯隊は結句それを隱す口實に過ぎぬと評者は思ふ。

小澤中佐の歩兵第七聯隊も同樣て、頗ぶる其行動が緩漫を極めて此日午後四時漸くにして前陽東南高地に達したが。此の聯隊が灣柳河に到著したのは此日午前十時前であつて、此の命令を受けたのは正午であるのに、其北方高地を迂回したとあるがそれても距離は一里内外である。其一里内外しかも其前には後歩第十九聯隊第二大隊が居つたのであるのに、其一里内外を進むに四時間を費やしたとは何たることであるか、全く蟲のはう樣な行軍をしたものと見へる。此聯隊も自分は此日全く戰意がなかつたのであつて、決して地形や降雪の爲めに此樣に運動が遲延したのであるとは思はれぬのである。更に砲兵大隊も午後二時過ぎには放列を立派に布き了りながら、此樣に友軍歩兵が敵火の爲めに前進に惱んて居たに關せず、射距離が遠いといふ理由の下に何もせずに遊んて居て、比志島少將から催促の通報を受けて始めて射撃を開いたがこれも全くの申譯的であつた。此樣な申し合せた樣に皆が皆迄攻撃に不熱心ては、到底眞面目な戰鬪の出來樣筈がないのである。實に此の日此の比志島部隊の行動は齒痒ゆいことばかりてある、若し今少し三輪君も小澤君も熱心になつて、砲兵が布列すると共に三家子北方高地の敵を砲撃するか、又は清河城東北の砲兵と烈しく砲戰を始めて。後歩第七聯隊は正面より速に

三家子北方露軍の所謂デニキン山高地を攻撃し、三輪中佐は其部下一大隊を以て前面の谷地を通過して前陽北方の高地を占領したならば、此方面は此の日の中に一方附いたかも知れぬのである。若し兵力が不足であればどし〳〵増援を受ければよい、後方灣柳河には師團の豫備隊が大欠伸をして、朝から待ちくたびれてしびれを切らして居るのである。然るに比志島部隊の諸隊長が何れも不熱心であつた爲めに、終いにこれを攻取することが出來なんだのは如何にも殘念至極であるが。併し其原因を深く立ち入つて穿鑿して見ると、此日此の諸隊は實の所は此の英守堡子附近迄を占領するのに、大分の激戰を交へねばならぬと豫期して居たのであつたが。それが降雪といふ天の賜の爲めに何等手剛はい抵抗に出會はずして、英守堡子北方陣地を手に入れたものであるから。陷り易すい何人にも必ずありがちなる油斷が出て、それが爲めに各隊ともに申合せた樣に緩漫極まる運動をするに至つたのであつて。決して〳〵此人々が臆病や恐怖の爲めに、此樣な態度に出たのでないのは極めて明白であるが、其怠慢油斷の罪は決して免がれることは出來ぬと評者は思ふ。

後備師團の左翼第一線たりし橋本中佐部隊の方は如何にといふと、これは歩兵一大隊、砲二門、機關銃四挺といふ貧弱なる部隊を以て、主力とは大分左方へ距離を隔てたる英守堡子南方標高二八五の鞍部を一中隊で占領し。他は甸脚溝から北方に通ずる細道を砲兵の通過の出來る樣に、必死になつて殊勝にも道路の修繕をして居たのであつたが。後一時過に第十一師團と連繫して三家子南方高地を略取するを圖れとの命令を受領したのであるが。其前の敵陣地といふのは實に非常な嶮峻にして且つ堅固なる陣地であつて、露軍は之をペレスネフ山と命名して、其守將の勇猛にして其陣地の堅固無双なるを誇つて居た程の所であるから。守兵の數は多くはない樣であるけれども、僅々一大隊位の歩兵では迂濶に手出しは出來ぬのであつたが。さればとて其儘に指をくわへて引込んで居るべきでないと考へた橋本中佐は、細逕の修繕が出來たのを幸に、後砲第一中隊の砲二門を灣柳河西南約千五百米突の鞍部に布

陣せしめて、これを以て師團命令を受けてから約半時間の後にはペレスネフ山を砲擊し始め。それと相前後して先に二八五鞍部を占めて居た第六中隊の兩翼へ、第五、第七兩中隊を延伸增加して、敵を距るる約千米突に進出し其最右翼には機關銃四挺を增加して、猛烈に敵と火戰を交へ第八中隊を豫備として其後方近く控置した。此の時が午後の二時から三時位の時であつたが、丁度英守堡子の本道兩側に放列を布いた、比志島部隊の砲兵も其右斜の方向から此敵壘の左横づらを相當に烈しく砲擊して加勢してくれたけれども。何をいふにも敵壘は高く中天を摩するの有樣を以て、殆んど絶壁の如く聳立して居る上に、東西南の三面には堅固なる銃眼、掩蓋を有する散兵壕が設けられてある而已か。その東南方の凸角には重層の配備がしてあつて、其前方には三列の鹿砦が設けられてあるが。御丁寧にも其鹿砦の間々には鐵條網が張つてあるといふ念入りな有樣であるから、容易に此の橋本中佐の部隊位の孤立した力ではこれに迫ることが出來ずして、悶々の情禁ずる能はざりしも我銃砲火の威力が殆んど發揚し得られぬのを歎息して齒がみをして居たのである。此の橋本部隊も同じく此所で躊躇したのは比志島部隊と同一であるが、評者は此の橋本中佐の逡巡は實際に於て尤であると思ふ。如何なる大勇者を連れて來てもこれ以上の前進は出來ない、若しもそれを强行したとすればそれは全く無法である無益である。であるから同じく此地に停止して居たのは事實であるけれども、これは三輪中佐や小澤中佐の逡巡とは全く別物であつて、これは事實其狀況が已むを得なんだのであつて、橋本中佐は其盡すべきだけの責任を充分に盡して、熱心に敵を攻擊せんとしたが力足らずして此地に停止して居たので。これは決して責むべきでない況や師團の命令に、第十一師團と連繫してペレスネフ山を略取せよと明白に示してあるに於てをやである。

橋本中佐は健氣にも獨力で敵に向つて進んで見たが、到底其力の及ばざるを知つて此地に據つて戰鬪を持續し、第十一師團の諸隊の進來を待ちこれと相助け合ふて攻擊を進捗せしめんとして、敵の前方約千米突内外の地で持久

戰をして居る間に。東部富家樓子の方面から待ちに待ち焦れて居た、第十一師團の部隊が勇ましく前進して來て、橋本中佐の部隊の左翼へ連絡するに至つたので。此所に一同大に勇氣を倍加するといふ有樣で、頗ぶる勇敢に戰鬪を持續して居たが。午後五時頃に第十一師團の歩の第四十三聯隊第一大隊の渡邊少佐から、突擊決行の協議があつたので躊躇する所なく二つ返事で之に應じて。第六中隊の二小隊と第七中隊の一小隊を以て突擊隊とし、その他を以て射擊部隊として敵の堡壘へ午後六時を期して勇敢猛烈に攻擊を決行したが、敵も去るものである我が突擊部隊の前進するのを見て其射擊をさし控へた。橋本中佐何としてこれが敵の意地わるき欺瞞の企と考へ樣ぞ、我火力始めて少しく威力を現はしたりと勇み立つて、必死に前進を督勵した爲めに射擊部隊と機關銃の彈雨の中を、突擊部隊が肅々として敵前約五十米突に前進したのは午後六時半であつたが。敵は依然として其射擊が頗ぶる振はぬので益〻敵の勢力衰ろへたりと誤信し、危險を冒して進路を偵察して、鹿砦破壞の爲めに我斥候が、例の三重鹿砦の近くへ迫つたと見たる敵兵は。今迄我慢に我慢して我近接を待つて全滅に陷いらしめんと目論んで居たのであるから、それつとばかりに急霰暴雨も啻ならざる鉛の雨を頭の上から浴びせかけ。まだそれても足らぬと思ふたかして、無性矢鱈に手榴彈を放擲するといふ爲體、我損害は一時に非常な多數に達したが何の小癪な露助奴と、鐵火の中をも物ともせぬ勇猛無双の後備兵達は、殆んど絶壁同樣なる敵陣地前に攀登して、鹿砦鐵條網を跳り越へて敵前十數米突迄進んだけれども。何をいふにも近距離の猛射が掩蓋銃眼を有する堅壘から雨注せられる上に、百雷一時に轟發するかと怪しまれる手榴彈の連投せられるには、流石の勇士も少なからず辟易して思はず約百米突を退却した。殘念ではあるがこれは實に已むを得ぬ、地の利は人の和に如かずといふが、如何に人和があつても此の地形ではとても叶はぬのは當然である。其中に日が沒して仕舞たので到底再び突擊をもり返すの力もなく、多くの死傷者を收容して舊位地まで退却するに至つたのは、

實に殘念とも遺憾ともいひ方のない敗戰をやつたものであつた。

此場合若しも突擊隊に今少しく多くの兵力を用ひて、射擊部隊の方を減少して何度も〳〵突擊を繰り返したならば、或は成效したかも知れぬが何分にも地形が多數兵員の突進を許さぬので、是非なく此樣な微弱な兵力を用ひたのであらふが。此時若しも此の突擊隊の心の中に、敵の火力の衰ろへたのを全く我を欺く手段と知つて居たものがあつたならば、まさかにこれ程な失敗はせなんだであらふが。橋本中佐を始めとして我火力發揚せりと信じて仕舞たものであるから、突つ込め〳〵と大勢で岩石の間を攀登して、極々敵に接近してから非常な猛射を喰つたのであつて。此所に幾分此の橋本中佐の手ぬかりがないでもないが、併し大兵を擁して地形や敵情不明に口實をなすり付けて、頗ぶる付の緩漫なる戰鬪をやる人而已の多かつた此の二十三日に於て。獨力を以て砲兵の道普請迄してやつて敵に近接して、堅固無双の天空に聳ゆる堅城に向つて、其鹿砦鐵條網をも少しも恐れずして、勇猛果敢に突擊を決行したのは、橋本中佐實に天晴れなるやり方であつて。勝敗は時の運である自分は此の日の此の橋本中佐の戰を、後備第一師團第一番の出來榮えである壓卷であると稱賛するに躊躇せぬ。

評者は此の二十三日の戰史を繙讀して、實は非常に驚ろいたのである悲しんだのである、それは外でもないが此のペレスネフ山と露軍で命名したる、三家子南方高地の攻擊に於て大尉吉田友磨君の戰死して居ることである。實は評者は此人を半年程中隊長と戴だいて其下に職務を奉じたことがあるのである。此の吉田大尉は石川縣の人で一度陸軍大臣になつた木越中將や、永らく士官學校長をして後に憲兵司令官になつた南部中將などと共に、明治初年に金澤から東京に出て來た人であつて。明治十年の西南の戰爭には戰功あつて勳章を賜はつたが、彼れは其手に負傷してそれから片手は充分にきかなんだのであつた。彼れは此時既に中尉であつたといふが其性頗ぶる狷介な所があつたものであるから、上からも下からも餘りに可愛がられぬ人であつて。

十二年か十三年間中尉をして居て漸くにして大尉に昇進したのであつたが、評者が其部下となつて同じ中隊に奉職して見ると、頗る古武士の風のある男であつて自分は大に推服したのである。然るに彼れは依然として上官の御覺え芽出度からずして、日清戰役には後備隊にまはされて出征もせぬ中に、部下の下士卒の反抗に出會ふて頗る評判を惡るくして。人は叙勳の進級のといふ時期に於て、彼れ吉田友磨君は大尉の儘て在鄕軍人となつて仕舞はれた。其前後から自分は東京に轉任したので全く其消息を知るを得なんだが、日露戰役中にも度々此人のことを思ひ出して如何にして、居るかと緬想したことがあつたのであるが。事に紛れて忘れて居た中に此戰史に於て始めて此人の消息を得ることは得たが、それは此のペレスネフ山に於て戰死したといふ消息であつた。彼れの戰死を以て評者は決して不幸とはいはぬ、又決して氣の毒とも何とも思はぬ却て羨ましいと思ふのであるが。去るにても彼れの如き氣品高く一主義ある相當の人物が、永年の間陸軍に奉職して居りながら常に

上官下僚の誤解のみを受けて、十二、三年も大尉になれずに我慢して居つたに係はらず、日清役には出征もせずして豫備に入るの非運に遭遇し。更に日露の戰役には古今未曾有の大會戰たる、此奉天會戰の手始めに人に後れず戰死をして居りながら、猶ほ且つ少佐にも昇進し得なんだとは、何といふ悲慘な境遇にのみ立つた不幸の人であつたらふ。思ひ出せば其人の威嚴ある顏容が眼前に彷彿する樣に思はれて、評者は思はず評論以外の筆を走らすに至つたのである。が併し彼れは毀譽褒貶他の是非するなどは少しも頓著せぬ男であつて、自から信ずる所を行ふた人であつたから。思ふに老衰して絹蒲團の上で死ぬ樣な恥辱を受けずして、此の摩天の勢を以て清河城東に聳へ立てる、ペレスネフ山上に其屍を横たへたのを、四十年來不遇と不幸に滿ち〳〵たる一生の間に於て、最も愉快に最も得意なる時代として、今や高天か原の天邊に於て安らかに我が此日本國の幸福を守護して居られるであらふ。これは評者の想像ではない其忠魂は必ず神として此の世を護つて居るに相違ないので

ある。

此二十三日に於ける第十一師團の行動は隨分と研究することも多い樣であるから、次回に於て詳細にこれを研究するつもりてあるが、此の橋本中佐部隊の左に連繫してペレスネフ山を攻擊したる、渡邊小太郎少佐の大隊及び近藤末四郎少佐大隊の行動は。前述の敗戰と大關係があるのてあるから、今からそれを概略評論して此回を終ることにし樣と思ふ。一體此の第十一師團の右翼隊長前田少將は二十二日に於て鮫島師團長から、『二十三日午前三時團山子より流响哨に亘る線を占領して右翼隊の轉進を掩護し後午前七時を期して正面より清河城東南高地の敵を攻擊すべし』といふ意味の大任務を課せられて。夜中に於て大分の混雜を演じながら左翼隊の轉進を掩護して、さて其任務が終了したけれども敵の附近に居る樣な模樣がないので、清河城東南高地に向つて前進を始めて、東部富家樓子を通過せんとする場合。丁度これが二十三日の午後零時十分頃であつたが、此時俄然三家子南方高地から激烈なる銃火を受け、次て清河城東南高地の砲兵からも射擊せられたので、砲兵大隊まて村端に持ち出して奮戰したが戰鬪少しも進捗せず。此所に其主力を停止せしめて其敵情を搜索して、此の前面の兵力を少なくも此の前田右翼隊と同等なりと判斷した。そこて前衞として此の東部富家樓子の西北端を占領せる、歩兵第四十三聯隊第三大隊の近藤少佐の大隊の右翼に、同聯隊第一大隊の渡邊少佐の第一、第二、第三中隊を散開せしめ、東部富家樓子東北の高地を占領せしめ、其第四中隊を同村內に止めて同村端に放列を布いたる、砲兵第十一聯隊第一大隊の護衞に任じて置き。物に動ぜぬ前田少將は自から渡邊少佐を隨がへて第一大隊の占領したる高地上に登つて、敵情と地形を偵察して第一、第三大隊に、三家子南方高地の攻擊を命じ、砲兵大隊及び左側衞に此の攻擊を援助せしめる樣に申付けたが。渡邊少佐が其大隊を此の高地上に散開して敵に向て射擊を始めると相前後して、既に前に述べたる後備師團の橋本中佐部隊が其右翼に出て來たのでここに愈〻勢を得て。相協力して攻擊を實行するにあ

らざれば、地形の要害なると塹壕の堅固なるとに依つて、到底之を攻略することは不可能であるといふ渡邊少佐の意見で。其兩翼にある橋本中佐及び第三大隊長の近藤末四郎少佐と交渉して、何れも此至當なる渡邊少佐の發意に同意したので、第一線諸隊は午後六時まで何れも現陣地に蔭蔽して、其約束の時期の至るを待て居たが。前田少將は師團の豫備隊から增援を得たので第四中隊を渡邊少佐に返還した。て渡邊少佐は其第二、第三中隊を突擊隊とし、第四中隊と機關銃四挺を以て現在高地から射擊を以て援助せしめ。又近藤少佐は第一、第十中隊を突擊隊として、第十一中隊と機關銃二挺を射擊部隊とした。てあるから橋本中佐の部隊と合計すると三面より突擊する部隊が合計五中隊てあつて、又其援助に任じたる射擊部隊が五中隊と機關銃十挺てあつたが、何分にも嶮峻にして堅固なる敵陣地は容易に之を陷落せしめ得ぬ。此間富家樓子西北端に布陣した砲兵第十一聯隊の第一大隊にも、猛烈にこれを射擊せしめたが掩蓋を有する敵壘は、中々以てこれ等砲擊に辟易する樣な樣子は毛ぶりも見せぬので。諸隊は千辛萬苦して敵の壘下に肉薄して、屍山血河の慘狀を物ともせずに大奮鬪を繼續して居る中に。右翼に居た後備師團の橋本中佐の突擊隊が、先づ第一番に擊退せられて仕舞たので、これに相對して居た敵兵は渡邊大隊の突擊隊を側射するに至たといふ大騷動。これも終に支ふる能はずして千仞の功を一簣に缺くといふ樣な、最もきはどい所までこぎつけながら此攻擊は成功せずして。何れの突擊部隊も終に其目的を放棄して一先づ日沒と共に、晝間の舊陣地まで退却するに至つたのである。

此突擊の不結果なりし原因は、第一番に敵陣地の堅固にして且つ要害を占めたにあるけれども。それと同時に前田支隊の前衞は此の山上に敵の居るのを豫期せずして、例の軍の指示したる標高三二六の鞍部に而已目を注そいて前進したので。此の富家樓子の出口に於て俄然不意にペレスネフ山上の銃火に浴し、爲めに少しく狼狽してこれに對したのは事實である。これが爲めに其處置及び部署の上に非常に不充分の點が多かつたが、沈勇なる渡邊少佐が

中央に位置を占めて、其左右兩部隊と協議して一齊に起つて突擊したのは申分はなかつたが。前にもいふた通り橋本中佐の突擊部隊の兵力が餘りに過少てあつたので、第一番に敗退してそれが愈〻敵に勢を付ける原因となり、終に全突擊部隊は舊位置まで退却せざるを得ざるに至つたのであつて。此場合此の山上を守つて居たのは勇猛なるペレスネフ中佐の指揮する歩兵二中隊と徒歩せる哥騎兵半中隊であつたといふから、夜に入つてから各突擊隊が最ふ一奮發すれば陷落せしめられぬといふことはなかつたらふに。何分にも最初に狼狽せしめられて應急的に攻擊を決行したので、前田支隊の方には隨分無理なる行動が多く。豫め準備してかかつた橋本中佐の方では、其突擊部隊の兵力が過少であつたといふ樣な、種々なる原因の集結した爲めに。折角渡邊少佐が苦心して協議をまとめて、三面一時に決行したる三家子南方高地の攻擊も、遂に其功を奏せずして二月二十三日の日は全く暮れて仕舞たのであつた。

此日露軍の方では此ペレスネフ山を守つて居た兩中隊の拔群なる戰功を激賞して、リネウヰチ大將はゲオルギー勳章を一中隊に五箇宛即時に授與したのであつたが、如何にもそれ位の褒賞はあつて然るべきものであると評者も信ずる。であるから大苦戰はしたけれども此の高地を守れる露兵の志氣は、頗ぶる振起せられて一人も生還を期するものがないといふ有樣。爲めに翌二十四日の攻擊も少なからず此山上の攻略に人命と時間を徒費したのは殘念であつたが、露軍中には中々多くの勇猛な將卒があつて、就中其防禦戰に於て常に非常な忍耐の手本を示して居るのは事實であつて、これは實に我が日本軍の大に學ぶべき參考とすべき所であると評者は思ふ。先づこれ位で此の回の研究は一と先づ終りとして、愈〻二十四日の清河城攻略の戰と、二十三日に於ける第十一師團の行動の梗概の研究は、これを次回に讓ることにし樣。

糧食分配の折　成仁

椎の葉にもるてふ飯を
玉梨蔗の葉につゝみゆく
兵士のゝとも

大正四年六月七日印刷
大正四年六月九日發行

戰史評論奥附

著作者　無名戰士

發行者　東京市麹町區平河町四丁目十一番地　宮本林治

印刷者　東京市赤坂區田町五丁目十一番地　山田三次郎

發行所　東京市麹町區平河町　宮本武林堂
振替口座東京一〇九一二番
電話番町五五一八番

不許複製

T氏著

歩兵中隊戰闘教練

●代金ハ前金ヲ振替口座へ拂込ヲ乞フ

菊判洋布製
價六拾錢
郵税八錢

内容

總論—中隊戰闘教練ノ根本義—計畫(計畫ノ素因。計畫ト實施ノ關係。教育量。使用時日。地形。空包。想定……)—實施(指導法。教練ノ活氣。射撃指揮。援隊)—講評—計畫實施ノ範例—結論—附表(中隊戰闘教練ニ於テ教育スヘキ事項。第二期中隊戰闘教練教育計畫表。同上細目教育計畫表)—引用附圖(青山、代々木練兵場五千分ノ一圖)

本書ハ教育家トシテ。戰術家トシテ。射撃家トシテ。且ツハ所謂精神家トシテ常ニ世人ノ。而シテ軍隊ノ模範テウ名聲ヲ恣ニセシT氏ノ著ニ係ル權威アル罕覯ノ一書ナリ。其說ク所ノモノ。中隊戰闘教練ノ根本主義ヨリ其實施計畫ノ細目ニ至ル迄順ヲ逐ヒ序ヲ尋ネ幾多ノ實驗ト統計トニ鑑ミ。解シ易ク且ツ直ニ實施シ得ル如ク懇篤細說到ラサルナシ。正ニ是レ大正現代ノ軍隊教育ニ向テ最モ大ナル光明タルト共ニ最モ新ラシキ指針タラスンハアラス。由來中隊教練ニ關スル著書尠シトセサルモ本書ノ如キハ蓋シ空前ト言フヲ憚ラス。是レ敢テ世ノ中隊教育ニ任スル各官ハ勿論中隊以上乃至中隊以下ノ教育ニ參スル諸官ノ爲ニ座右ノ珍トシテ特ニ推奬スル所ナリ。

發行所 東京振替口座一〇九一二 東京麹町區平河町四丁目番地 宮本武林堂

五月刊行
戰史評論 豫告 「清河城附近戰闘 下」

大正四年五月（清河城附近戰鬪　下）

戰史評論

大正
4.6.24
内交

宮本武林堂發行

戰史評論

成仁武夫補
無名戰士評

第二十五回　清河城附近の戰鬪　下

前回に於ては二月二十三日の第十一師團の戰鬪の一部を研究したばかりで、其大部分は未だ記述するに及ばなんだのであるから。今から二十三日に於ける第十一師團の行動の梗概を評論して、更に進んで二十四日に於ける清河城陣地の攻略の全般に及び、終りに於て露軍に關しても少しく研究して以て此の戰鬪研究の局を結ぶ考へであるが。此戰鬪は敵の兵力を牽制するといふ特別の任務の大眼目があつた爲めに、至る所に於て非常に無理な行動が多かつたので、隨て之を研究する上にも頗ぶる興味と利益が多いと評者は考へるの

てあるから。諸君に於ても充分に戰史を熟讀玩味せられて、大々的に得る所のある樣に深く其眞相の討究に熱中せられんことを切望に堪へぬのである。閑話休題これから愈本問題の評論を開始して、讀者諸君と共に此の戰鬪の眞價値の有無大小如何の討論を繼續して、顯秘闡幽以て此の戰史の中から有らん限りの利益を搾取して、此の實驗の遺してくれた大切な敎訓を毫厘も無駄にせぬ樣にしたいと思ふ。

少しく順序が後戻りをする樣で變てはあるが、二十二日の夜に於て軍命令の意を體して鮫島第十一師團長の下した命令から研究を始め樣と思ふが、其命令の要旨は大略左の如きものであつた。

一、前田少將の率ゆる歩兵一聯隊、騎兵一分隊、砲兵一大隊(二小隊欠)機關銃十挺、工兵一中隊より成る右翼隊は二十三日午前三時團山子附近より流晌哨附近に亘る線を占領して右翼隊の轉進を掩護したる後午前七時を期し正面より清河城東南高地附近の敵を攻擊すべし

二、山中少將の率ゆる歩兵二大隊、騎兵一小隊、砲兵一中隊、機關銃六挺、工兵一中隊(一小隊欠)より成る左翼隊は馬家城子に集合の後二十三日午前六時其後尾を以て南部富成峪附近に至り趙家甸子、流晌哨、閻家嶺子を經て望城崗子に向ひ該方面の敵を攻擊すべし

三、鈴木(堅二)少佐の指揮する歩兵三中隊、騎兵一分隊、砲二門、機關銃二挺、工兵一小隊の支隊は依然朴家堡子に位置し一部を以て觀音閣附近を占領し軍の左側を掩護すべし

四、歩兵三大隊(一中隊欠)、騎兵一中隊(一小隊欠)、砲兵一大隊、機關銃六挺、工兵一中隊(一小隊欠)より成る豫備隊は午前六時馬家城子に集合すべし

此命令は大に研究する餘地があると評者は思ふ。其第一項に於て二十一日以來前方に出て居た前田支隊の名前を、第十一師團の右翼隊と改名届けをなさしめて、それに團山子から流晌哨の間を占領させ、左翼隊の轉進掩護を命じたのは異存はない。又其後に清河城東南高地を攻擊する如く命じたのも適

當てあつたと思ふが、第二項に就ては評者は大分に申分があるのである。戰史の上に記述してある此第二項の命令要旨の書き方が自分には全く了解することが出來ぬ。といふのは此の山中少將の左翼隊は一旦午前六時に於て馬家城子に集合し、其後尾を以て南部富成峪附近に至り。それから趙家甸子へ急に空中を飛んでいつて逆戻りをして、更に流晌哨、閻家嶺子を經て望城崗子に向ひ攻擊せよといふのであつて。此の文章の示す所では此の左翼隊の行動は、頗ぶる不思議千萬奇妙奇體奇天烈であつて、到底人力では其樣な不可思議な運動はなし得られぬと評者は思ふ。但し實施の有樣に就て見ると其命令の主意は、馬家城子に集合したる山中左翼隊の後尾に在る一部を以て、別なる進路を進んで先行して閻家嶺附近を占領させて置き。さて其主力は馬家城子から趙家甸子、流晌哨、閻家嶺子と太子河々谷を御苦勞千萬にも西國順禮をして、然る後始めて其行進の目的たるべき望城崗子の方へ向つて攻擊を始めろといふ意味の樣であるが。此の第二項の命令要旨の文面では如何に想像力に

富んだる人物でも、到底鮫島師團長の希望して居る眞意を解して其意圖の如く行動することは出來ぬと思ふ。西洋には讀心術といふ奇妙な幻術があるとか聞いたことがあるが、此の命令を受領すべき山中少將が其讀心術の大家であつたらばいざ知らず、一般普通の日本人のしかも餘り融通のきかぬ軍人であつたとしたならば、此樣な意味深長？な命令の含蓄して居る御希望は、如何にするとも到底推察し能はぬと評者は信ずる。でも現在山中少將は師團長の意圖の如くに運動したてはないかと、如何にも戰史には正に確かに師團長の御考案通り御意圖の如くに運動して居るが、それが又實に評者には不思議て不思議てならぬのである。此樣な冗漫にして不簡單不明瞭な命令を師團に金ぴかの參謀長や參謀がうよ〳〵して居りながら、若し實際に於て下したものとすれば全く以て驚天動地の大事件である、これて戰爭が出來るものなればそれこそ戰術の學習も研究も糞もいつたものではない。が併し多分これは戰史に要旨を載せる時分に餘りに簡略にし過ぎた爲めに簡單不明瞭といふ過

失に陷つたのであつて、師團が戰場で此樣な命令を下したものではあるまいと評者は信ずる。罪の疑がはしきはこれ輕くすといふ古人の金言もあることであるから、これは全く戰史を作る時の省筆が度に過ぎたものとして寛大に處分しても、まだ〳〵評者には此の山中少將に命じたる太子河々谷の西國順禮の意味を了解するに苦しむのである。山中少將の部隊を閭家嶺方面に轉進せしめて、南方から敵の右側を衝くといふ作戰の計畫は頗ぶる同意である、一言の非難も一言の申分もないのであるが。馬家城子から其以南にかけて二十二日夜に宿營して居た此左翼隊を何の必要があつて、態々趙家甸子くんだり迄引ばつていつて、更にそれからあと戻りをして流响哨から閭家嶺子の方へ引返させる必要があるのであるか。評者には此のぐつと昔の佛式の操典にあつた往還行進が頗ぶる了解出來ぬのである。山地は嶮峻である積雪は脛を沒する有樣であるから、隨分山を越へてゆくのは一通りならず難儀であるには相違ない、が併し雪は谷でも山でも少しも其量に於て變化はない、或は山よりも谷底の方が却て雪の積る量は多いかも知れぬ。其上に今や氷結して居た太子河は至る所其氷が解けかかつて居るのは事實である。果して然らば馬家城子から太子河を八回も九回も右に渡り左に渡りして、約略五里にも垂なんとする太子河谷を傳ふて轉進するよりも、自分の考では北甸子、菜子窰溝を經て鍋成石に出た方が遙かに便利であると思ふ。此方の道を通るとすれば約三里を以て閭家嶺子附近に達せられる筈である、左すれば例の順禮道中よりは殆んど二里程近いのである。何故に師團長は此道を山中少將に進ませなんだのであらふ。或は此道からは馬は進められぬかも知れぬが、評者の考へる所では多分馬の通過をも許すと思ふが。若し萬一にも馬が全く通過の出來ぬとしたならば。それ等の足弱どもを一括として相當の護衛を附して太子河谷を迂回せしめて、其歩兵だけでも前にいふた捷路をとつて富成峪の方へ出た方が味方の爲に利益である。何でも積雪や山路の嶮岨を頻りと戰史は歌つて居るけれども、庄田達次郎君はしかも暗夜に此道路を進んで、零時半から午

前七時迄を費やして南部富成峪の隘路口に到著して居る。即ち約二里の道程に六時間を費やして居るから、隨分行進は困難であつたに相違ないが。それでも山中少將が其あとから跟隨していつたとしたならば、遲くも午前の九時と十時の間には其歩兵は富成峪隘路の入口には到著すべき筈である。然るに御苦勞千萬にも遠路を順禮しておまけに太子河が處々で解氷を始めたものであるから。全く以て雁木鑪りといふ大遲滯を來して、正午過ぎに至つて漸くにして、庄田少佐の後方に到著したのである。參考の爲めに右翼隊の歩兵第四十三聯隊の第二大隊のことを一寸とここに引例するが、松田大隊長は聯隊の命令を午前二時過ぎに受領してそれから出發準備をして、哈叭嶺から達子嶺を經て其西北麓即ち鍋成石へ達するまでに、午前三時より同五時三十分までかかつて居るが。其里程が約一里で其大部分は下り坂であるから、行進は比較的速い方であつたらふがそれでも二時間半を費やして居る。で此場合一里を通過するに二時乃至三時間を費やすとして見ても、趙家甸子を迂回するよりは遙に此の達子嶺道に依るのが捷路である時間の節減が出來るのである。

以上は單に此の閆家嶺子の方に轉進するに就て時間の多少に重きを置いて論じたのであるが、時間などは何でもよい纏まつて平らな道を通るのが便利だといふならば、それはそれてよいとしてまだ〳〵外に頗ぶる危險なる理由がある。敵が富家樓子の方面ばかりでなく閆家嶺の方面にも其兵力を配備して居るのは當然である、然るに此の二十三日の早朝に庄田少佐の一大隊而已を遠く孤立して南部富成峪に挺進せしめて置き、其主力は悠々閑々といふ次第ではないが例の太子河の西國順禮に空しく時間を費やして、現に庄田大隊が南部富成峪へ到達してからも、其後方へ左翼隊の主力が到著するに五時間餘もかかつたのであるから。若し此の閆家嶺方面の敵が有力なものであつて、果斷にして機動に富める指揮官を有して居たならば。此の朝から正午までの長時間の間に、猛烈に攻勢に轉じて此の庄田大隊を擊退して、逃ぐるを追ふて我退路を遮斷せんとするの策に出たかも知れぬ。否々知れぬてはない其樣

にするのが最も至當なる處置であるのである。斯くなつた場合には庄田大隊が全滅に陷る而已では濟まない、山中少將は太子河の谷の中で事實進退谷まり立ずくみといふ境遇に陷らねばならぬ。であるから評者は何れにしても此の師團命令の第二項のやり方は、絶對的に不同意である不賛成である。何人の畫策に出た方略かは知らぬけれども、これは全く愚中の愚策拙中の拙計と評すべきものであらふ。況んや其文面の不明瞭不透徹なるに於てをやである。此樣な迂回順禮命令を下したものであるから、山中少將は閭家嶺に到著するのが遲くなり、隨て充分の敵情偵察が出來なんだ爲めに、終に翌二十四日に於て大敗戰の失態を演ずるに至つたのであつて、これ實に其根本をただせば此命令に大なる罪があるといはねばならぬ。前にいふた外に點線路ではあるが水洞西南方太子河の西方に彎曲して居る所に、僅々千米突餘の山地を越へれば直ちに流响哨に出られる小徑もある、これなぞも少しく注意を拂つたならば使用し得られぬことはなかつたであらふ。更に又此の山中左翼隊が近く

敵を其進路の右側全體に控へて、四里以上の大迂回を爲すに當つて之が掩護に任じたるものは。圓山子附近に一部隊と流响哨に一部隊、更に遠く西南に離れて南部富成峪に一部隊出したばかりであつて。其間々は全くのからあきてこれが實に不用心千萬である。此樣な恐ろしい危ぶない藝當をやるよりは、鍋成石へ通ずる道なり又は流响哨へ越へる道なりを通れば、不意に側面から敵の壓迫を受ける樣な危險がないのみか、場合によつては此の兩道から分進して其行進の困難を減ずることも或は出來樣。何れにしても評者は此の轉進の爲めに選定したる太子河々盂の大迂回ば、決して至當であるといふことが出來ぬと思ふ。又此のつまらぬ大迂回の轉進の爲めに無闇と早くから軍隊を使役して居るが、勿論其必要のある場合には連日連夜如何なる辛苦を重ぬても、遠慮會釋なく之れを使用せねば戰勝は得られぬのはいふ迄もないが。唯此左翼隊の轉進しかも其頗ぶる變妙なる方角から轉進をせしむる加勢の爲めとあつて、第十一師團の右翼隊は午前三時迄に甸脚溝から流响哨附近に亘る

間まで前進して、其掩護に任ぜねばならぬことになつたので、第十一師團の全部が此の二十二日の夜半から、寒い〳〵雪の中で徹夜の運動をせねばならぬ羽目になつたが。これなども決して好んで用ゆべき方法であるまいと思ふ。此日後に此の第十一師團が何れの方面に於ても活潑果敢なる戰鬪をなし得ずして、戰鬪準備の隊形を以て敵と相對して交綏するに至つたのも、蓋し此の睡眠不足が大なる原因をなして居るのは事實であつて。又其左翼隊の轉進が非常に遲々たりし原因もいふ迄もなく、必ず此の雪夜徹宵的の行軍が大に其因をなして居るのである。其他に就ては別にいふべきことはないが其豫備隊を馬家城子に集合せしめたのは、萬一庄田大隊が敵に擊退せられた場合此方面に速に應援し得るといふ便利もあつて、先づ〳〵これ等は適當といふことを得るであらふ。其距離が頗ぶる遠大に過ぎるのは事實であるけれども、それは此樣な大迂回の轉進を行ふ場合であるから、先づこれは已むを得ぬ次第であつて咎むべきでない而已か、評者は此の豫備隊の位置は先づ〳〵適當であると認めて置く。さて先づこれて此命令に對する研究は終りを告げることにして、偖て今からは更に此の命令の實施に就て大に評論の筆を走らせて見樣と思ふ。

此夜前田少將は翌日の午前三時迄に、歩兵第四十三聯隊の第三大隊長近藤少佐の大隊に團山子附近を。同第二大隊長松田少佐の大隊を以て流响哨を占領せしむる樣に、それ〳〵機を失せず命令を下したのであつたが。何をいふにも大雪の夜中のことであるから、殆んど碌々寢ずに其準備をしたに關せず、第三大隊は午前三時に到著すべき團山子へ五時三十分に到著するといふ有樣。又第二大隊の方では既に此夜第一線たる哈叭嶺の守備に任じて居たのであるから、前田少將の命令が三松聯隊長に下つて、更に其命令が聯隊に於て煮かへしの如く作製せられて、此の松田少佐の手許へ達する迄には大分の時間を要するのであるが。其上に雪中夜中山中と三中揃つた嶮路を傳達するに更に大に時間を要して、此命令が松田少佐の手には入つたのは彼是れ午前二時過

ぎてあつた。午前三時から流响哨に於て掩護の任務に就くべき大隊が、僅か一時間足らずしか其時間を餘さぬ午前二時過ぎに、まだ任地迄は一里以上もある大雪の山の中でしかも夜間に此の命令を得たのであるから。これも同じく大遲延をして午前五時半頃に山麓の鍋成石の附近に達し、それから一中隊を流响哨西方高地に先遣して、主力の太子河を渡過する掩護をさせて遲れに〳〵て午前八時に目的の地に到著したが。先に出したる第八中隊とは全く相見失ふて仕舞て、午後四時に至つて始めて相合するを得たといふ始末。これては渡河掩護もなにもあつたものではない。又左翼隊の後尾から轉進して閭嶺家に向ふたる庄田大隊も、午前七時に始めて南部富成峪隘路口に達したといふ樣な有樣で、此朝此の右翼隊の爲めに夜通し騷動をした諸隊の結果は頗ぶる不結果であつて。若し敵が今少し近く位置して此朝でも何か企だてた場合には、第十一師團の左翼隊は非常な危險に陷るのは目前。まして況や前田少將の差遣した掩護隊の如きは、閭山子から流响哨迄の間を占領して掩護の

任に當る筈であつたのに。近藤大隊は閭山子附近にかたまつて居るといふ爲體であつた上。一方の松田大隊も非常に遲れて第八中隊の位置を搜索するにばかり憂き身をやつして、これも流响哨にごちや〳〵にかたまつて居たのであるから。勿論立派な道路はないけれども此の掩護隊と掩護隊の中間は、全くがらんとあけ放しになつて居たのであつて、其不用心は實に此上なかつたのであるが。これ實に餘りに其轉進を急そいだ爲めに生じた失態であつて、幸に敵が防禦に決心した後であつたから危險がなかつた樣なものの。若しも昨日の如く依然敵が我軍に對して攻勢を取ることを繼續して居たならば、如何なる大敗北を來したか知れぬと評者は思ふのであつて。結局第十一師團が各方面とも此日に於て實施した位の程度の戰をやるつもりであつたならば、今少し充分に計畫して雪の中を徹夜運動せしむる樣な無理なるやり方をせずして、詳細に地形道路を偵察し、二十三日の拂曉に諸運動を開始したならば、萬事に就いて便利であつて嶮岨なる山路をしかも尺にも餘る雪の中を、夜中

に行動する樣な非常な困難も非常な混雜も起らぬから、隨て其運動は快速に實行せられて或は此の徹夜の行動よりは、却て早朝からの運動開始の方が萬事迅速に都合よく運んだかも知れぬ。よし此日の實際より早くはならずとも、決して〳〵これより遲くなる樣なことは毛頭ない筈であると評者は考へる。左すれば兵隊の疲勞せねだけでも我軍には大利益であつて、此日の午後に於ける戰鬪の上に於ても想ふに此日の實際の樣に、何れの方面も惰氣滿々意氣全く振はざるが如き、極めて意氣地なきつまらぬ結果には陷らなんだであらふと想像する。但し此場合第十一師團の此命令に聊か同情をしてやつて、餘りにこれを非難するのは氣の毒であるといふのは、一刻も早く大なる兵力を展開して、敵の大兵力を是非とも此方面に牽引せねば、此軍の目的が達せられぬのである以上は、千艱萬難を排除して眠らず食はず晝夜兼行をしても、是非とも此大眼目の大任務を果さねばならぬ。此の樣な特殊の事情が伏在して居つたのであるから、無理とは知りながらまだ充分に集中の了らぬ各隊を、急遽前進せしめんとして大焦りに焦つたのが原因で、却つて此樣な頗ぶる不始末なる行動をやるに至つたのであつて。これを深く咎むるのは餘りに無情な樣てはあるが、其やり方の拙なかつたのは事實であつて、『急がば廻れ』といふ古人の名諺は實に全く眞理である。此時此の急がば廻れの諺を鮫島師團長が守つたならば、此樣な雜駁にして紊亂せる行動はせなんだであらふと思ふのは、强ち自分ばかりの得手勝手な庇理窟でもなからふと思ふ。

偖て掩護の配備は右樣な非常に不完全なものであつたけれども、風雪と敵の動かなんだのと遠かつたのとで少しも異狀なく、左翼隊は例の順禮をやりながら十時頃には右翼隊の掩護區域の外に去つて仕舞たのであつたが、此前後に於て右翼隊は掩護の位置に就いた儘で何等の爲す所がなかつたのは不都合である。師團の命令には午前七時から清河城東南高地の攻擊にかかるべく示されて居るが、種々なる手違ひだらけの爲めに左翼隊が午前七時にはまだ其背後を通りぬけて居らなんだから、其通過し終るのを待つて運動を起した

のは支障はないけれども。前田少將の前遣した近藤大隊の團山子に到著したのは午前五時半である、午前八時には前田少將も此の右翼隊の豫備隊と共に、趙家甸子迄前進して來て居るのは戰史の記載する通りである。然るにも係はらず此の右翼隊は午前十時左翼隊の後尾が趙家甸子を通り過ぎて仕舞ふまで、約五時間充分に敵情を探るでもなければ、又爾後の任務の準備をするでもなくして、何のことはない安閑として時間を徒費して居つた樣である。てあるから此の午前十時頃までも聊かも敵に就ての報告が前田少將には達せなんだ。そこで前田少將は附近に敵なきものと判斷して、團山子の近藤大隊へ其缺いてあつた第十二中隊を歸還せしめ、此の全大隊を以て始めて前衞として清河城に向つて出發せしめたが。此樣な手ぬるいことをして居るから敵に侮りを受けて十分な戰を交へることが出來ぬ樣になるのてある。元より今朝夜中に出發する時から一切のことを豫め命令することは出來ぬのはあたり前てあるが、既に團山子附近に到著したのが午前五時半であつたとすれば、午前十時迄には四時間强の時間を費やして居る。此間に於て此の近藤少佐か又は三松聯隊長に命じて、充分に各其方面の敵情を偵察せしむる餘裕は確にあるてはないか。それに單に左翼隊掩護の爲めに他のことは何にもせずして、午前十時迄ころんだ箸も起すことをせなんだのは前田少將もよろしくなければ、又其前に出て居た三松中佐も近藤少佐も大の凡愚等であるといはれても詮方あるまい。但し戰史には三松中佐が趙家甸子に其豫備隊たる歩兵第四十三聯隊の第九中隊と共に居つて、團山子に居る近藤少佐の許へ

『團山子及東部富家樓子附近一帶ニハ敵兵ヲ見ズ貴官ハ更ニ進ンデ東部富家樓子北方高地ヲ占領シ敵情ヲ搜索スルヲ勉ムベシ』

といふ意味の命令を傳達せしめたけれども、傳令は何れも降雪の爲めに其目的を達せずして歸還したと記述してあるが。左すれば此の朝の旣に夜のあけた天明頃から後に至つても、此の目と鼻の近藤大隊と三松中佐との間の連絡は全く斷絶して居たのてある。若しも其連繫が失なはれなんだならば、趙

家甸子から圍山子迄は僅々千米突足らずである。如何に降雪が烈しからふとも傳令が何度も命令を傳達し得ずして、歸つて來るといふ樣な不都合なことはない筈である。て評者の考には此の方面の掩護隊も、矢張夜中雪中山中の三中行軍であてられて連絡が全く絶へたのであつて。それで此の三松中佐の機宜に適したる命令も、適時にこれを近藤少佐に傳へることが出來なんだのであつて。これ實に單に掩護の爲めのみにも其配備が非常に不完全である上に、嗣後の攻擊動作の爲めには全然其準備をして居なんだものといふことが出來る。單に此方ばかりではない流晌哨の方に出た松田大隊も、午前八時頃に其地には到著したけれども、先に出した第八中隊の在りかが全く知れなんだのは戰史にもある通りで。既に第三大隊の近藤少佐と連絡の付かぬ所から、趙家甸子西方高地へ登つて第二大隊松田少佐の流晌哨の方の樣子を知らんとした三松中佐は。山の頗ぶる嶮峻な爲めに一時躊躇したが終に意を決して、少し方向をかへて該山上に攀登して、正午頃には松田少佐と連絡を通じ得た

けれども。此樣な本道外の山中には入つた上に降雪が甚しかつたので、今度は此の三松中佐と前田少將との連絡が全く絶へて仕舞たので、前田少將は直接に近藤少佐へ第十二中隊を遣して前衛となつて前進することを命令した。此樣に萬事が喰違ひだらけとなるのは何の爲めであるかといふと、度々繰り返す樣ではあるが全く昨夜々中に無理な行動をさしたのが抑〻の原因となつて、何れの方面何れの部隊も皆連絡が不充分になつて仕舞たのであつて、これでは到底滿足な戰鬪の出來樣筈がないのである。陣中要務令第五篇第四章第二百二十一に曰く

『出發時刻ノ選定ハ早キニ過グ可カラズ若シ作戰上ノ要求ニ妨ゲナキトキハ第一ニ出發スル歩兵ト雖モ成ルベク拂曉以前ニ出發セシム可カラズ騎兵及砲兵ニ在リテハ多クハ拂曉一時間後ニ出發セシムルヲ可トス』

これは決して等閑視すべきものでないのである。如何に作戰上の要求があつたとしても毎日〳〵、夜半から運動をさせる樣な無理をやつては、自から

破滅を招くと同樣なものであつて。前々回にも後備師團の爲めに論じたと思ふが、此の鴨軍の各師團は無闇に徹夜行動を好んだ傾向がある。これ實に不必要なる勞働を軍隊に要求するものであつて、全く此陣中要務令の規定を顧慮せざる、兵力を愛惜せぬ無情千萬なるやり方で。爲めに其報酬は續々として其日及び其翌日に於て、運動の不活潑となり攻擊の不進捗となり更に傳令の不達となり、種々樣々に變形して四方八面に現出するに至つたのであつて、これ實に當然なる結果といはざるを得ぬのである。

此樣なことで三松中佐は流响哨の松田大隊の方にいつて仕舞たので、前田少將は松田大隊(第七中隊欠)と同聯隊の第九中隊と機關銃四挺を以て、已むを得ざるに出た窮策ではあつたがこれを右翼隊の左側衛として、西部富家樓子を經て清河城東南高地の敵を攻擊せしむることにしたが。此の又左側衛殿はどこで何をして御座つたか知らぬが、前田少將の命令の如く馬家溝から西部馬家樓子の方へ向つて流响哨を出發したのは、岩谷赤天狗の廣告ではないが

實に驚く勿れ此日の午後三時であつた。一體此の松田少佐も又三松中佐も、午前八時師團の左翼隊が其背後を通過してから後無慮七時間、大切な〳〵此の一刻千萬金にも換へられぬ七時間をどこで何として徒消したのであるか。まして況んや此の松田大隊ではまだ此出發の時刻には、今朝先發せしめた第八中隊はいまだに迷兒になつて居るに於てをやである。實に言語同斷沙汰の限りとはこのことであらふ。

右翼隊の前衛たりし近藤少佐の大隊は、これも隨分と緩漫至極ではあつたが午後零時過ぎには敵に向つて前進を起して居る、がこれとても午前八時からは何時でも前進の出來る境遇に立つて居たのであるが。三松中佐と此の大隊の連絡がとれて居らぬ上に、かてて加へて其中に三松中佐が第二大隊の方へ迷ひ出し、それから直接前田少將の命令を受けて前衛となるといふ樣な、大分に無駄手間ばかりかけて居たのでこれも約四時間の間、貴重な時間を徒費するに至つたのであつて。其結果はそれから後に三家子南方高地を近藤、渡

邊兩大隊で攻擊するに至つて、其突擊が一回挫折して第二回目に工兵を招致して突擊再起をせんとしたが、時間が足りず日が暮れたので終にこれもおじやんとなつて仕舞つたといふ失敗に終つたのである。又此の攻擊に援助を與へよとの命を受けて居た三松中佐は、三時から流响哨を出發したのであるから、全く此の攻擊に加勢する所の沙汰ではない。少し耳の遠い評者などの如きものには、其銃砲聲も皆無聞へぬ位な遠方で停止して仕舞て、今日はこれぎり先づ攻擊は明日のことと暢氣千萬に構へ込んで仕舞た。此樣に前田右翼隊の諸隊が揃ひも揃ふて頗ぶる緩漫極まる行動をするに至つたのは、後備師團に於て論じたと同じ原因にも依るけれども、此の方面の此の緩怠は全く昨夜の徹夜の影響であつて、雪中の夜道をしかも嶮岨な山路を、殆んど一睡もせずにひつぱりまはされた爲めに。終に翌二十三日の行動の上に、其困憊疲勞の色彩が遺憾なく發揮せられてさてこそ此樣な不都合千萬なる、大緩漫大倦怠の不體裁をさらけ出すに至つたのである。さるにても實に馬鹿〳〵しい

拙ない戰鬪のやり方をしたものではないか。

元より積雪の爲めではあらふが前には趙家甸子と團山子、其距離僅々千米突內外の所でありながら近藤少佐に送つた三松中佐の前進の命令が、一度ならず二度も三度も通じなんだといふのも頗ぶる變であるし。更に又此の右翼隊の左側衞たる三松中佐の部隊が、何等なすことなく午後三時まで居ずくまりをして、大遲延の後出發したかと思ふと馬家溝北方の道路結氷して、爲めに其跋涉が非常に困難で僅々二千米突を進むに二時間を費やし、間誤々々して居る所へ三家子南方高地攻擊を援助すべき命令が到著したが。前面の地形が嶮岨であつたのと旣に日暮れに近く時が晩いといふ理由のもとに、とう〳〵又々此所に居座はりになつて仕舞たが。評者の見る所を以てすれば此の流响哨、馬家溝間も山間の比較的平坦なる道路であつて、如何に結氷して居つたとしても步兵と機關銃が通過するに千米突に一時間を費やすべき筈がない。又前の趙家甸子、團山子の間の通路の如きは、金斗嶺の方から流れて來て太子河

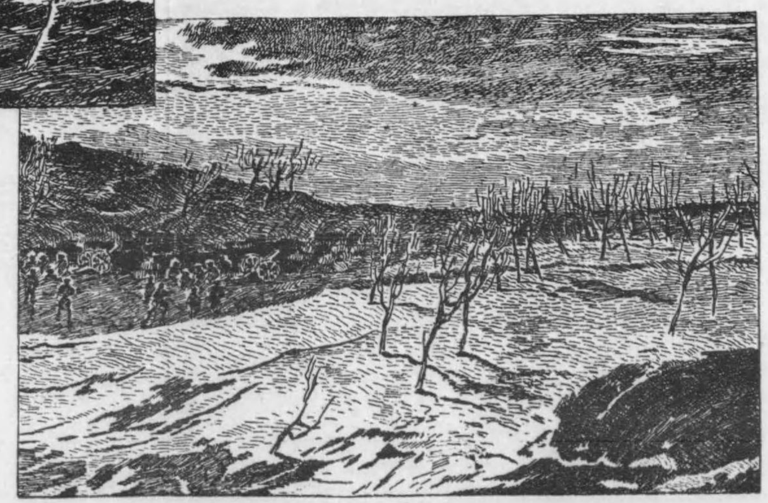
に合する川の磧の平地であつて、其距離僅々千米突の所が如何なる大吹雪でも通行の出來ぬ譯がない。であるから附圖の地形から考へてはこれ等の記事は、何となく責任のがれの口實としか評者には受け取れぬ。失禮な申分ながら此の清河城の戰鬪に限つて、大分に此樣な頗ぶる疑問に屬すべき記述のし方が多いので、評者は實は或る時此の鴨綠江軍の參謀であつた一將軍に、この序を以て此の事を質問して見たのであつたが。事實此の戰鬪の際は傳令などが非常に時間を多く費やすので、參謀部でも大分不審を抱いて其將軍なども自から飛び出して、直接其傳令の任に當つて見たことがある模樣であるが。如何にも夜中であり雪中である上に敵情頗ぶる不明である爲めに、非常に時間を費やして今まで大に疑つて居たことの至當でなかつたことを悟つたといふ實驗談を承まはつたが。それにしても此の今自分が不審を打つた二條の如きは、餘りに自分は有り得べからざる程に其事情が變妙千萬であると考へることを措くを得ぬのである。

前田少將方面はこれから例の三家子南方高地攻擊があつたのであるが、それは前回に於て略〻これを研究したから略することにして。此夜東部富家樓子の前哨に任じたる步兵第二十二聯隊の第三大隊が、晝間に於て步兵第四十三聯隊の第十二中隊が其山下まで進迫して居た所の、西部富家樓子東北高地の敵砲兵の夜襲を企だて。直接前哨となりし第十中隊を除く他の三中隊から、各將校一下士卒三十を選拔して一隊を編成し。これを第九中隊長たる白石大尉が指揮して、此夜十時東部富家樓子を出發して夜襲を決行したが。これは既に晝間から護衞の少ない敵砲兵を夜襲し樣といふ腹案があつたに關せず、其準備も其偵察も極めて不充分であつた爲めに、其進路として採用すべく考へて居た同高地の東側は斷崖にして全く登ることが出來ず。又山頂より少し下つた所には障碍物があるといふので、少しく方向を西の方にかへて午前一時の月の出ぬ前にと、非常に注意して巔頂に向つて前進したけれども。此の潛行した方面には槲樹の小木が密生して居て、それには澤山の枯れ葉が殘つ

てくゝいて居た爲めに。それががらゝ音をたてて鳴るものであるから此の潜行は何のやくにもたゝずして、却つて我夜襲を頗ぶる明白に敵に報告する材料となつたので、此白石大尉の苦心慘憺たりし決死の夜襲も美事に大失敗に終つて仕舞たが。これなぞも餘りに其偵察なり準備なりが不充分である。高地東側の嶮岨て攀登の出來るか出來ぬか位は、晝間一見すれば決して解らぬ筈もなければ、又其西方の斜面に枯葉のある矮樹が密生して居ることも、雪のある時である以上はなほ更明瞭に知れる筈である。然るに其樣なことには全く頓著せずして夜襲を企だてて、美事失敗に終つて仕舞たなどは、如何に此の右翼隊の此日の戰鬪に於ける諸計畫が、疎漏千萬杜撰至極であつたかはこれでも其一班が知れると評者は思ふ。先づこれ位て右翼隊の小言は數限りがないから打ちきることにして、さてこれからは左翼隊たる山中少將の方の研究に移ることにするが、これが又非常に失策や過失の連發であるには閉口頓首せざるを得ぬ。

九十九道人白道画

白石中隊ノ砲兵夜襲



左翼隊長山中信義少將は師團命令に基づき、歩兵第四十四聯隊の第一大隊（一中隊と一小隊欠）をして、午前三時迄に富成峪附近に至り其附近に在る敵を擊攘し、閏家嶺及賽梨賽方向に對して主力の前進を掩護せしめて、其他の部隊を午前二時三十分に馬家城子北端に集合する樣に命令を下したが。掩護の任務を負へる庄田少佐の歩の第四十四の第一大隊は、二十三日午前零時三十分茱子窰溝を出發して、雪深き山路を達子嶺、鍋成石、大陽といふ順序に前進していつたが。山路嶮岨なる上に雪夜の行軍であるから、豫想以外に多くの時間を費やして、其前衞たる第二中隊の始めて南部富成峪南方隘路口に達したのが、かれこれ二十三日の午前七時であつて。行程二里を通過するに六時間半を費やして居るから、一里を行進するに約三時間餘を要したことになつたのである。そこで豫定の時間よりは大分に後れたけれども難なく目的地に到著した庄田少佐は、前衞たる第二中隊をして前面に居た約十人程の敵を驅逐せしめて、閏家嶺方面の敵に對して嚴重に警戒せしめて、第三中隊（一小隊欠）

を左方賽梨賽方向に派遣して敵情を捜索せしめた。其中に大陽北方の高地に小部隊の敵が居ることを見付け出して、前衛から二分隊を出して之を驅逐したる後同高地を我が手に入れたが。午前八時少し過ぎになると一小隊程の敵の歩兵が、南部富成峪東方の高地に現出したので、前衛は直ちに其高地の西側に散開して之と火戰を交へた。又第三中隊の向ふた賽梨賽には敵が居らぬので、其報告が庄田大隊長の手許へ逸早くも到著したから。庄田少佐は此の第三中隊に監視兵而已を賽梨賽に殘さして、主力は其北方の高地を經て今前衛と戰を交へつつある敵の、右側背へ進出せしむる如く運動せよと命令して。さて前衛は逐次急峻なる斜面を進みて敵に迫り、敵を距るる約五百米突に達して猛烈なる射擊を敵線上に集中し、暫時にしてこれを北方に擊退し更に第四中隊を前線に加へて、極々猛烈に退却する敵を追擊せしめたが。此の兩中隊は午前十一時三十分南部富成峪に進入し、同村東西の兩高地を占領して閭家嶺の方を警戒し、左翼隊主力の太子河々盂から來著するを待て居たが。其

間に賽梨賽から敵背に迫る豫定であつた第三中隊も、南部富成峪に於て大隊に合するといふ都合になつた。此の庄田大隊の動作に就ては何等のいふべきことはない、唯此の大隊が雪夜の山地行軍とはいへ、午前零時三十分に葉子窰溝を出發して、僅々二里にも足らぬ南部富成峪の隘路の入口に達するのに、六時間半の時間を費やしたのは餘りに時間がかかり過ぎたと思ふ。此の一點を除いては此大隊の行動は概して批評を加ふべき所がないと思ふ。

話あとに戻つて山中少將は其左翼隊の主力を午前二時三十分迄に集合させて、歩兵第四十四聯隊第三大隊(二中隊欠)騎兵一分隊、工兵一中隊(一小隊欠)を權藤傳次少佐に指揮せしめて前衛とし。馬家城子を出發して豫定の如く、水洞、小高力營子、流响哨、鍋成石を經て南部富成峪に向つたが。此の通路は太子河の河盂を大迂回して、可成平坦なる地を選んだものであるに係はらず、其進路は決して前に想像した樣な良道にあらずして頗ぶる嶮難であつた上に。未だ〈大丈夫であると思ふて居た太子河の厚氷りは、此の二、三日來の急に催し

たる暖氣の爲めに、降雪中であるに係はらず到る所に於て、氷上通過の非常に危險なるを感ぜしめる狀況であつたが。其薄氣味惡い戰々兢々として薄氷をふむが如しといふ譬の如き、融解しかけた太子河の氷上を、右へ渡り左へ越へ前後七八回も渡つたので、お話にならぬ程の長時間を費やして、先頭が例の隘路南方の口に達したのは、最早此の二十三日の正午過ぎてあつて。四里餘の道程を十時間を費やして行進した割合であるから、一里に要した時間は彼是れ二時間半を費やした譯になる。此樣な莫大な時間を費やす覺悟ならば、最初から庄田大隊と同じ道路を進む方が遙にましであつた。此方は庄田大隊の行進の如く一里に三時間を要するとしても三里であるから九時間で目的の隘路口に達することが出來て、午前十一時前後には庄田大隊の後方に開進することが出來る而已か。此方の進路を經て進むと極めた以上には庄田大隊を前衞にすれば、これで自己の警戒の爲めには充分であるから、雪の夜中に右翼隊まで騷がして掩護をしてもらふ必要がないのである。此の樣に山中

少將が獨立して閏家嶺の方へ進むことが出來たとしたならば、右翼隊は當日の朝から專心清河城東南方高地を攻擊することが出來て。爲めに此日の戰鬪の經過を非常に迅速に、且つ必然好都合に運ばしめ得たに相違ないと評者は思ふ。これは山中少將の罪ではないこれは全く師團命令の罪であつて、それを以て山中少將を責めるのは少しく酷であるのは知て居るが。其罪の何人にあるかを追窮するの必要なしとして、兎にも角にも此大迂回的轉進は頗ぶる拙ない愚かなるやり方であつたと、評者は非常に殘念に思ふ次第である。

權藤少佐の前衞が庄田少佐の掩護陣地を占めて居る所へ到著すると、丁度其頃に降雪がやんだので始めて閏家嶺に敵の陣地のあるのが知れた。これが午後二時少し前であつたが、山中少將は主力を南部富成峪に開進して、現在極めて不明なる敵情を威力を以て偵察せんとして、砲兵中隊と步兵若干中隊を以て此任務に當らせて、猛烈なる射擊を以て敵の動搖如何を見たのであつたが。何分にも昨夜が殆んど一睡もせぬといふ有樣である上に、非常な困難

を冒して十時間の後に此の隘路口に達したのであるから、此の威力偵察も思ふ樣には行なはれずして、餘り立派なる香ばしき結果を得る能はなんだが。それても敵兵一大隊程が閭家嶺から其西方高地を經て、西部富成峪西方鞍部に亘り陣地を占領して、其砲兵は約四門てあるといふことを搜り得た。けれども最早それが午後の四時半てあつたので、土地の嶮と敵陣の堅きと日の晩に近きとの三つの理由て、前掲の如き不充分なる判斷をしたる而已て其攻擊を翌日に延したのてあつた。

攻擊を此二十三日にやるといふことは到底不可能てある、からしてこれを翌日に延期したのは評者も同意てあるが。山中少將の此地に達したのは午後二時前後てあつて、それから熱心に此の偵察に取りかかれば、約四時間の間は敵情の搜索に使用する時間がある。からしてこれを充分に利用してもつと〳〵詳細に敵情を搜索し、以て翌日に於ける攻擊の準備の爲めに確實なる敵の陣地兵力等を探偵して置く必要がある。これは強ち此の場合出來難い程な

困難な仕事てはないのてある。然るに昨夜々中から運動を起して居眠りをしながら雪の夜道を行軍して、解けかかつた太子河の氷水の中へ何度も〳〵陷落しかけつつ、此日の正午頃にやつとのことて南部富成峪に到著した左翼隊は、其疲勞と困憊は更に再びこれを使役するに忍びぬ樣な有樣てあつたらふ。そこて山中少將も砲兵と少しばかりの步兵て敵の氣を引いて見て、閭家嶺から前山と南山の方にかけて、步兵が約一大隊と砲四門の備へてある模樣なのを知つて。これて敵情の知り方が充分とは思はなんだに相違ないが、先づ此位て此日の仕事を切りあげて、少しても早く其部下一同に休憩を與へてやりたいといふ考から、此日其一端しか得なんだ敵情を以て輕率なる判斷を下して、翌日の爲めの攻擊計畫を此の不充分なる判斷を基礎として決定した。即ち敵は其右翼が東溝及大西溝の西方まて、遠く我が左翼に延長して居たのを全く見落して、西部富成峪の鞍部て其右翼は仕舞てあると信じたものてあるから、これが爲め翌二十四日には非常な苦戰をなさざるを得ざるに至つた。

これ實に不眠の疲勞から偵察が不充分になり、其不充分な偵察から不確實なる敵情判斷をするに至つて、終に其累を翌日の攻擊動作の上に迄波及せしむるに至つたのであつて。其第一の原因は師團の轉進命令が頗ぶる無理であつたのにあるが、併し山中少將も餘り姑息の愛に溺れて、今少しといふ所で勞を惜しんで充分な偵察をしなんだのは、これも決して過なしとはいふを得ぬのである。これで二十三日に於ける評論は結尾として更にこれから翌二十四日に於ける研究に移るが、これが又頗ぶる付の研究材料の豐富なるには、一驚も二驚も喫せざるを得ぬのには更に喫驚せざるを得ぬのである。

軍司令官は二十四日の爲めに二十三日の午後八時過、馬家城子に於て命令を下して兩師團をして明拂曉より攻擊を續行せしむることにして。司令官自身は午前六時馬家城子を出發して同七時に趙家甸子に著し、此朝馬家城子附近に集合する筈の軍總豫備隊は、之を水洞に進ましめることにして次でこれを趙家甸子迄招致した。阪井中將は軍の命令を二十三日の午後十時半に受領して、一時間の後なる午後十一時半に左の如き部署をなして、以て二十四日に於ける攻擊を準備したが、此命令の下し方は頗ぶる迅速であつたと思ふ。

一、河村支隊は依然師團の右翼を警戒して葦子峪にあるべし

二、右側支隊は師團の右側を掩護して依然金斗峪に位置し其一部を以て馬圈子を占領すべし

三、後備步兵第十三聯隊長鈴木常武中佐は步兵一大隊、機關銃四挺を率ひ後貝溝方向より小甸子附近の敵の側背に向つて動作し右翼隊の攻擊を援助すべし

四、右翼隊は三家子北方高地に向ひ攻擊を繼續すべし

五、左翼隊は第十一師團と連繫し三家子南方高地の攻擊を繼續すべし

六、徒步砲兵第一獨立大隊は英守堡子北方に放列を布き左翼隊の攻擊を援助すべし

七、豫備隊(步兵二大隊と一中隊、騎兵一小隊、工兵一中隊)は灣柳河西北方高地

脚に位置すべし

此命令は概して同意である、就中昨日豫備隊にありし後歩第十三聯隊の鈴木中佐に、歩兵一大隊と機關銃四挺を屬して、遠く北方より敵の左側背に行動せしめたると。昨日の攻撃不成效に鑑がみる所があつて、獨立徒歩砲兵大隊をして三家子南方高地の攻撃に參加せしめたのは、頗ぶる評者の贊同する所であつて最も適當なる處置である。いでや右の二十四日の現場に於て此命令が如何に實施せられたかに就て今から逐次にこれを評論することにし樣と思ふ。

鈴木中佐は午前五時灣柳河を出發して、北溝の谷地を西北に向つて前進したが。此の歩兵一大隊、機關銃四挺の一小支隊が、後貝溝東方標高六五二の附近に達したのは、午前十一時であつたと戰史に記載してあるが、評者は實に此の時間の誤寫であることを疑はざるを得ぬのである。何故ならば此谷地は左まてに行進困難なる地形と見へぬ上に、其灣柳河から標高六五二迄の距離

は僅かに一里内外である。如何に大雪でも嶮岨でも一大隊位の小部隊で、六時間の時を費やすといふのは法外千萬であると評者は思ふ。一體阪井中將は此の鈴木後歩第十三聯隊長に前記部隊を率ひしめて、遠く北方から迂回して八家窩棚西方標高四三五の高地附近に進出せしめ、小甸子の敵の左側背を脅かして、前陽から三家子北方高地の敵をして退路の不安に陷らしめ。其機に乗じて正面から後歩第七、後歩第十九聯隊、即ち比志島右翼隊の全力を擧げて之れを壓倒せしめんとの考案で、此の鈴木中佐の部隊を早朝から運動を起こさせたのである。然るに此の重任を負ふて寸刻も早く目的地たる八家窩棚以西に進出すべき鈴木中佐は、何處で何事をして居たのか其點は不判然であるが、唯行進したとしては如何にしても其費やし方の方法の知れぬ程な、無慮六時間といふ時間を一里の道程を通過する爲めに費消したのである。此樣に緩漫至極な行進をして居るものであるから、師團長の豫期の如くに速に小甸子の敵の左側背に出ることが出來ず。そこで三輪中佐も森田少佐も其樣な蟻

はい的の迂回の成功を待つ譯にゆかぬので、漸次攻撃を開始して三輪中佐の如きは、其聯隊を前陽北方から其稍〻西北方に進めて前面の敵と激戰して居たが。丁度此の戰の眞つ最中に初めて鈴木中佐が其遙か東方の、後貝溝南方標高五二八に出て來たので、これを其聯隊の左翼に連ならしめて前面の敵を攻撃さしたが。此樣な右翼隊の右翼に延伸增加をして敵を攻撃する位の平凡極まることをさせる爲めならば、何も一大隊の歩兵と四挺の機關銃を指揮する爲めに、態々鈴木聯隊長を此方面にやる必要はない。大隊の指揮者たる下川大隊長がこれを引率してゆけば澤山である、何の爲めに無益に高級の指揮官を差遣するの必要があらふやである。

師團長が態々此の鈴木常武中佐に此の一大隊の歩兵を率ひさして、此の方面に派遣したといふ眞意は決して此樣な月並式な仕事をさせ樣爲めではないのである。昨日の攻撃の模樣で三家子北方高地の頗ぶる堅固なるを知つたる師團長は、正面からこれを攻撃しては徒らに時間を費やし人命を損ずるばかりで、容易にこれを陷落せしむることが出來ぬと考へたので。右翼隊たる比志島少將が正面及び右翼から、前陽及三家子北方高地を攻撃しつつある間に。一刻も速に此の鈴木支隊を北溝から後貝溝、八家窩棚と、遠く北方を迂回して全然小甸子の敵の北側に進出して。退路不安の爲めに前陽及び三家子北方高地の敵が、じつとして居られぬ樣にせんとして、それが爲めに此支隊を差遣したのである。此樣な非常に大切な且つ非常に難かしい任務を負はせたのであるから、それて此の歩兵一大隊、機關銃四挺の小部隊に態々鈴木聯隊長を屬してやつたのである。然るに此の鈴木中佐は其眞意圖を知るや知らずや、遲れも〳〵たり一里の道に六時間を費やして、やつとのことで後貝溝の南方に達して、更に北方に迂回して其目的を達成し樣とはせずして。三輪中佐の交渉に應じて其半分を後歩第十九聯隊の右翼に連なつて戰鬪に加はらしめ、自分は歩兵二中隊と機關銃四挺を控置して、悠然として標高五二八の北方に停止して居たには、評者は實に開いた口が塞がらぬ程に呆れ返らざるを得ぬの

である。これ位のことをさせ樣爲めならば、實に全く下川大尉一人で澤山である餘つてかへるのである、無用の長物たる聯隊長を附屬せしめる必要が何れにあるか。讀者諸君ここである此所が大に平常から考慮を要すべき所である、單に一大隊しか用ひぬ樣な場合に、大事な聯隊長をそれに屬して其指揮を執らしむるといふ樣な場合には、必ずや大隊長では其目的を達成するのに荷が重も過ぎる樣な、頗ぶる大切なる重任を遂行せしむるを要するので、それて聯隊長を態々差遣するのであつて。聯隊を分割した爲めに聯隊本部が不用になつたから、それでお添へもののつもりで聯隊長をおまけにつける譯では毛頭ない。此邊の所に充分に注意を拂はぬといふと、命令がなかつたから訓示を受けなんだから、それで其樣な意味であつたとは知らなんだといふ樣な、頗ぶる頓馬な大失態を演ずるに至るのである。此場合鈴木中佐は確かに師團長が同官を差遣したる眞意を了解せなんだ、それであるから此樣な平凡なる動作に甘んじて居たのである。何に此命令に何もそんな難かしいことは

示してないと、馬鹿をいひ給ふな命令に何と書いてあるか、

『鈴木中佐ハ後貝溝方向ヨリ小甸子附近ノ敵ノ側背ニ動作シテ右翼隊ノ攻擊ヲ援助ス』

此の師團長の命令の文句には、如何にこれを鈴木中佐に有利なる如く解釋して見ても。三輪聯隊の右翼に連なつて戰鬪し、自分は豫備隊を握つて後貝溝南方に居れといふ意味は少しも含まれて居らぬ。即ちその樣な誰れにでも出來る藝當ならば大隊長一人で澤山出來る、それを聯隊長をやつたのは小甸子の敵の側背に迫るといふ、重大なる任務を首尾よく成就せしめんが爲めには、大隊長一人の力では少しく其力量の不足を感ずる恐れがあつたから、それで聯隊長の御出馬を命じたのであるが。其眞意を知るや知らずや鈴木中佐は、莫大の時間を徒らに費やしたる後に於て、出も出たり三輪中佐の背後に出たに至つては、言語同斷沙汰の限り全く聯隊本部は無用の長物賣り出しの景物といはれても、之に抗議を申込むの權利は鈴木中佐にはない筈であると

評者は思ふ。若しも此の日此の鈴木中佐が午前五時に灣柳河を出發して、北溝の谷地から標高六五二を經て後貝溝北方高地稜線を傳ふて、八家窩棚西方の標高四三五附近を目標として、熱心に其重任の爲めに其行進を急がせたならば。元來僅々一大隊の小部隊であるから、此の行程二里内外の所まで達する爲めには、多くも六時間を費やすに過ぎまいと思ふ。左すれば此の鈴木中佐が三輪聯隊の東方へ到著したる、午前十一時前後には正に小甸子の敵の側背に進出して、敵を非常に驚駭周章せしめ得たに相違ない。果して然らば敵は此日の日沒までも小甸子北方高地に停止することの出來ぬのはいふ迄もなく、此の鈴木支隊の出ると共に三家子北方及び前陽附近の敵兵は、必ず速に退却を始めたに相違ないのである。斯く考へて見たなれば此の鈴木中佐が其任務の眞意を解せずして、途中で三輪中佐に加勢してそれで責任を盡せりとしたことの、如何にも不當にして且つ後備師團の爲めに大損であつたことは、評者の言を待つことなく必ず讀者も明白に知り得られることと信ずるのであ

る。此の大役を受けながらそれを充分に仕遂げなんだ鈴木中佐は、實に武運の拙ない人であつたと評者は思ふ、運は天にあり牡丹餅は棚にありといふけれども、人事を盡して自から奮進してこれを取らぬ限りは、運も牡丹餅も決して先から口の中へはい込まぬといふことを、讀者諸君もよく〳〵了解せられんことを評者は切望に堪へぬのである。

昨日の因循姑息に反して三輪中佐の後歩第十九聯隊は、此日は大に活潑に動作したので、多少の缺點はないでもないが、先づこれは大目に見て置くことにして、概して其戰鬪は略〻適當に行なはれたものとし樣。而して更に甚だ氣の毒ではあるが今一つ苦言を呈して置かねばならぬのは、歩兵少佐森田喜平氏が代つて指揮したる後歩第七聯隊のことである。此聯隊は第一、第七の兩中隊が缺けて居たが、それでも六箇中隊の歩兵を握つて居て、其後方には右翼隊の豫備隊が控へて居る上に、其右後方には後砲第二中隊の四門が布列して居るのであるから、デニキン山を攻擊するには最も都合がよい位置に居たの

てあるが。午前六時にデニキン山東方高地を占めて敵と火戰を開いて以來、敵の兵力が最大限と思ふた時に約二中隊を算したと戰史に載せてあるから、森田少佐も大方敵を二中隊位と判斷したのであらふが。敵の陣地は堅固であつて散兵壕に掩蓋があるといふ理由の下に、速にこれを攻略し様とせなんだ而已か。其後敵は射擊を中止して壕中に匿れたけれども、それても此の森田少佐は到底獨力攻擊し難しとして射擊もせねば貧乏ゆるぎもせぬ。其様なことをして午前八時から全く戰鬪を休止して仕舞て、外では雪中の大苦戰をして居るのをどこを風が吹くかといふ有様。午前十一時過には敵が此のデニキン山の北方及び西方を續々退却するのが見へだしたけれども、それても此の後歩第七聯隊はまだ〳〵他隊の攻擊進捗不充分だといふのて勝手に休戰をして居て、午後二時に至つて比志島少將から猛烈なる督促を受けてそれから始めて泡を喰つて射擊を始めたが。此聯隊長代理殿などの行爲は戰術を以て評論すべきものか、はたそれ以上の法理を以て峻烈に研究すべきものか、評者は此様なことに餘りに多くをいふを好まぬのであるが、さりとは餘りに意氣地のない腑甲斐ない戰鬪のやり方ではないか。地形もとより嶮峻なり工事もとより堅牢なり、よし敵兵が二中隊しか居らぬとしても決して容易に侮ることは出來ぬのは當然であるが、森田少佐は六中隊を握つて居る。即ち豫想する敵に三倍する兵力があるのである。又其後方には比志島少將の豫備隊も居る。然るに午前六時から午前八時迄約二時間射擊をしたばかりて、それて全然攻擊は他隊の攻擊進捗を待つの外なしと決心して、午後の二時迄全六時間休戰をやつたとは、實に餘りに其心がけが自分はなさけないと思ふのである。三輪中佐も鈴木中佐も必死になつて働らいて居るのに、當の正面に向ふて最も多くの兵を擁したる此人は。此の眞つ晝間に敵の前て居眠り所の沙汰てはない、六時間もの晝寢をやつて平氣て御座つたのであるから、何とも彼とも批評の筆の下し方が全くない。臆病未練から此様なことをしたのでは決してあるまいが、代理といふ所から森田少佐が部下諸隊長に氣兼をして、餘

りに遠慮をし過ぎたのか。左もなくば此の人が最も猾智にたけた人物であつて、他隊に充分の骨を折らせて其戰況の進むに隨がつて、敵が自然の結果として逃げ出したる時を見はからつて、正面から猛烈に急進して實際は骨を折らずに他よりも拔群なる功を立て樣といふ、極々づるい考から此樣な過失を犯したのであらふ。其原因は前述兩樣の何れにあるとしても戰機を誤まるの大罪は免がれぬ。若し此少佐が今少し活氣ある動作をして、正面から三家子北方高地を朝から猛烈に攻擊してくれたならば、右翼隊方面の戰鬪は頗ぶる都合よく速に進捗したに相違なく。軍全般の戰鬪の上に非常に有利であつたのであるが、右では鈴木中佐が頗ぶる不充分な迂回をやり、此の本道附近では森田少佐が勝手に敵前休戰をやつたので、右翼隊の此日の戰鬪は殆んど零に近い樣なものになつて仕舞ふた。であるから本氣で戰つたのは結局三輪中佐一人といふてもよい樣な次第で、これでは如何に我兵力が優勢でも立派な戰鬪の出來る筈がないのである。何といふつまらぬ戰鬪をしたものであらふ。

繰り返してくどくいふ樣であるが、三家子北方高地即ち露軍でデニキン山といふた山に居た敵兵は。三家子南方高地たるペレスネフ山を、左翼隊の橋本中佐と第十一師團の赤澤、渡邊兩少佐が、協力して奪取してくれたお蔭で敵將の退却命令が下り、それで此の山の守兵が任意退却したのである。其退却してくれた跡へ森田少佐の聯隊が進んだのであつて、右翼隊の主力が力づくで此のデニキン山を陷落せしめたとはいへぬのである。若しも評者が前からいふた通りに鈴木中佐の支隊が思ひ切つてぐつと小甸子の北方に迄侵入して、それと相應じて森田少佐が三輪中佐にばかり骨を折らせて、暢氣に正面前で休憩をして居る樣な不人情をせずに、熱心猛烈に此の高地を攻擊したならば、十時から十一時頃までの間には此の高地は確かに奪取し得られたと思ふ。斯くなつた場合には其戰鬪は現況と正反對にペレスネフ山は此高地から背面射を受けることになるから、左翼隊や第十一師團の前田少將に非常な惡鬪苦戰を爲さしめずして、自然に我軍の手に落ちる樣になつたのは決して有り得べ

からざる想像てないのである。然るに鈴木中佐が思ひ切つたる迂回を決行し得なんだ上に、森田少佐は正面前に大兵を擁して休戰狀態で濟して居たので、戰鬪の進捗非常に行き惱んで却つて全然反對に、ペレスネフ山陷落のお蔭で此高地をやつと取つたのは實になさけない戰鬪のやり方であつた。自分だけ樂をして甘まいことをし樣といふ樣な考は、軍人として最も卑しむべく憎くむべき惡德である、これをどこ〳〵までも芟除かねば立派な軍人にはなれぬのである。

後備第一師團左翼隊たる橋本中佐の部隊は、昨日以來引續いて三家子南方高地東北面の攻擊に當り、昨夕一度散々に敗退したけれども此一夜の間に於て更に大に攻擊の準備を整へ。これと相連繫して其南方に位置せる第十一師團の、歩兵第四十三聯隊の第一、第三大隊も此の橋本中佐の隊と同樣に、二十四日早朝の一舉によつて敵を粉碎して昨日の耻辱を雪がんと熱中して居たが。此高地が清河城東方の最も緊要なる地點であることを知りたる各師團長は、

後備師團の方では徒歩砲兵の獨立大隊を英守堡子北方に配置し、更に後砲第一中隊と第二中隊の砲六門を英守堡子北方及び東方に布陣させて、何れも此のペレスネフ高地に其砲彈の雨を降らせ。又昨日來此高地を砲擊したる後砲第一中隊の砲二門は、橋本中佐部隊の後方標高二八五鞍部附近に放列を布き。第十一師團の野砲第十一聯隊第四、第六兩中隊は、東部富家樓子北方高地上に占位して、何れも猛烈なる砲擊を此のペレスネフ山上に集中したのであるから。敵の歩兵の苦戰は實に非常なものであつて、彼の戰史の述ぶる所によると全く其歩兵の銃の遊底は、此の砲彈炸裂の沙塵を蒙むつて、其開閉の自由を失なふに至つたといふことである。此樣に我砲兵の方が手揃になつたる上に、今朝午前五時歩兵第十二聯隊第一大隊(第三中隊欠)が赤澤少佐の指揮の下に、此の攻擊部隊の中央に增加したので愈〻其勇氣が加はつて。敵の火力は依然衰ろへなんだけれどもそれに頓著することなく、諸砲兵の援助を力として午前十時を期して、三面同時に突擊に移つて近く敵兵の五十米突前に迫り。

工兵の破壞班をして攻擊の爲めに副防禦を飛散せしめて、頗ぶる激烈なる大搭鬪を以て此高地を占領したが。此の突擊に際しての橋本中佐、赤澤少佐、近藤少佐、渡邊少佐の四隊は何れも隨分勇敢に戰かつた。而して其中て橋本中佐を除くの外の三人は、實は評者自身が何れも親しく交はつたことのある人達であるから、決して〳〵何れに對して依己贔屓をするといふ譯ではないが。此の四人の中で最も勇敢に戰つたのは赤澤梅雄少佐であつて、此人は他の諸部隊が半分以上を射擊部隊に殘したに關せず、彼は其三分の一を射擊部隊として自から二中隊を提げて突擊部隊を指揮し。其射擊部隊にも機を見て追隨すべく命令して置いたので、赤澤少佐の全三中隊は突擊時機には何れも第一線の最先頭に居つた而已か、工兵の破壞班が手榴彈や機關銃に辟易するといふ大苦戰の場合、同少佐が近く突擊部隊に居つた爲めに、勵聲叱咤其退避を喰ひ止めて終に七米突の破壞孔二箇所を作らしめて。更に其突入に當つても最先頭に突進し次て頂上の塹壕を奪ふ時にも、又々第一先頭を以て此の歩兵第十

二聯隊の第一大隊が勇戰した。て自分は此の三家子南方高地の攻略は諸砲兵の砲擊と、此の赤澤少佐の勇敢とが最大主因となつて成功したと稱するを憚からぬ。士官學校に同じく學んだ頃の赤澤梅雄君は、頗ぶる素朴にして溫和なる失禮ながらうぶの田舍漢てあつた。溫良なる好士官にはなられるてあらふと評者も信じて居たけれども、此人が此樣な勇敢なる猛將とならふとは全く以て思はなんだ。平素順良溫和なる人の中には時によると一度怒れば驚天動地の偉大な事をする人があるものであるが、此人なども矢張其部に屬する人てあつて、眞の勇者は平素は却つて此樣にやさしいものであるかと評者は頗ぶる此人の平素と此勇擧とに、深き感動の意を漏らさざるを得なんだのである。此のペレスネフ山占領を以て殆んど清河城戰鬪の勝敗は決したのである。左すれば此赤澤少佐勇進の突擊が、要するに此鴨綠江軍の最初の勝敗を決したといふことが出來る。考へて見れば軍人といふものは面白いものてある愉快なものてある、それに付けても大切なるは軍人の勇氣てある決心てあ

る、平素常住坐臥に此の勇氣の修養と心膽の鍛錬とに、充分の注意を拂つて置かぬと此樣な面白いことは出來ぬのである。

第十一師團長が昨日の儘に、右翼隊に三家子南方高地から西部富家樓子迄を攻撃せしめ、左翼隊に閭家嶺方面を攻めさせたのは異存はないが。午前八時半に至つて前田少將方面の戰況の展開せぬのを見て、新に中央隊を編成して中央方面から直ちに清河城を衝かんとしたが。此の攻撃計畫變更に就ては一言するの必要があると思ふ。若し此二十四日の朝ペレスネフ山が一蹶りに踏み落せたら兎に角、左もなくんば何とかせねば容易に此方面の戰況の進捗させ難いのは、今朝にならずとも昨晩から知れ切つて居つた筈である。て昨夕方の抵抗の强烈なりしより考へて見ても、三家子南方高地は尋常茶飯では陷落せぬのは明らかで。左すれば左翼隊の方は如何にといふと、これも大分廣い正面を占めて居るから、さう安々とは我手に落ちさうには思はれぬ。此場合鮫島中將の採つたる處置が右翼隊をして烈しく此ペレスネフ山を攻撃せ

しめ、更に左翼隊をして同樣に閭家嶺を猛烈に攻撃せしめて、此の第十一師團の左右兩翼隊の前進を防止する爲めに、敵が其總豫備隊を兩翼方面に送るべき時機を見はからつて。流响哨になり又は東部馬家溝になり控置してあり たる師團の豫備隊を以て、豫め充分の準備を整へて韮菜山堡子、石灰繞子の方から直に清河城に迫つたのならば、評者は其やり方が先づ〳〵相當であるといへると思ふが。此場合の鮫島閣下のやり方は全くそふいふ意味からでなくして、前田少將の攻撃が進捗せぬのと三松中佐が西部富家樓子迄進まずして中途でまご〳〵して居るのを見て、此朝になつてからの出來心で急に攻撃計畫を變更したのであるから。左なきだに其運動に豫想以外の時間を要したる此の雪中の山地戰では、全く此の攻撃計畫變更の戰鬪に與へたる效能は少しもなく、殆んど陰の舞いを演じて徒らに疲勞を求めたに過ぎぬのは遺憾千萬であつた。但し師團長が此樣な臨時の處置を爲さざるを得ざるに至つた動機を考へて見ると、前田少將の左側衞たりし三松中佐が、昨日以來殆んど何等

のなす所なくして馬家溝附近で烏鷺〳〵して居つて。命ぜられた清河城東南高地の攻撃もはか〳〵しくやりもせねば、又昨日からいひ付けられて居る三家子南方高地の攻撃の加勢も聊もせずして。實は殆んど空しく相當に有力なる兵隊を握つた儘で遊んで居るので、これを前田少將の方へ歸還せしめて、青木大佐に目覺ましく一働らきやらせ樣としたのであつて。此計畫變更の裏面には三松中佐の無爲無能が大分與かつて力があつた樣に思はれるが。何れにしても攻撃の途中に於て此樣な計畫變更などをなさずして、寧ろ此の前田少將の左側衞に豫備隊から兵力を加へて、これを青木大佐に指揮せしめて攻撃を進捗せしめた方が利益であつたと評者は思ふ。果せる哉師團長の變更したる計畫は其豫備運動中に日が暮れたので全く樂屋で聲をからして仕舞て、終に聊かも此日の役にはたたぬことになり了つて仕舞つたのは實に遺憾千萬で。途中に於て戰鬪の計畫を變更するといふことは、決して〳〵輕々しく試むべきことではない。戰況の自然の推移の爲めに自然と其計畫を變更せねば

ならぬことになるか、或は敵情又は友軍の都合の上萬已むを得ざる時の外は、此樣な師團といふ樣な大なる部隊に於て、猥りに計畫の變更をやるべき筈のものでない。これは大に熟慮沈思したる後に於てせぬと、其功がない而已ではない却つて敵に乘ぜられ易い隙をつくることになる。此時なぞは唯間に合はない而已で濟んだからまだ〳〵上出來の部で、まかり間違ふた場合には味方に非常の不利を來すのは目前であるから。攻撃の計畫などは必ず輕々しく途中で變更すべきものでない、齟齬衝突といふ樣な不祥は必ずこれに端を發するのである可恐可恐。

第十一師團の左翼隊の方が、これが又此日は實に申分のない大拙戰を交へたのには驚ろかざるを得ぬ。山中少將は前日の充分ならざる敵情偵察を根據として、前夜の午後九時に於て左の如き命令を西溝附近の宿營地で下した。

一、石原盧大佐は明二十四日午前五時を期し歩兵約一大隊を率ひて南山南方標高七六四高地の敵を奇襲し後轉じて閏家嶺を攻撃すべし

二、歩兵第四十四聯隊第三大隊(二中隊欠)機關銃二門は閏家嶺に對し石原大佐部隊の右側を掩護し同部隊と連繫して閏家嶺を攻撃すべし

三、砲兵第五中隊は午前五時南部富成峪の陣地に就くべし

四、歩兵一中隊、騎兵一小隊、工兵一中隊(一小隊欠)機關銃四挺は豫備隊となり午前五時迄に西溝南方村落に集合すべし

師團の左翼隊といふと名前は非常に立派であるが、此左翼隊は其實兵力が極めて貧弱千萬なのであるから、此樣な殆んど繕ろい普請の樣な部署をするの外には策がなかつたのであるが。此樣に兵力の少ない場合に於て其少ない兵力を、更に幾つにも〳〵分割して此樣な妙な部署をせずして全力を以て、南山になり又は閏家嶺になり一纏りになつて向つた方が利益であつたらふ。敵は既に數日來工事を施こして此地を堅固に占領して居るのであるから、餘程な强力を以てこれに衝突しなければ其陣地は突破れぬ。然るに山中少將は缺損だらけの二大隊實際一大隊少し餘しか居らぬ二大隊を以て、南山南方高

地を奇襲させると共に、更に閏家嶺の方に二中隊しかない大隊を向はせて、さて自分は歩兵一中隊と機關銃四挺を握つて控へて居たが。結局此左翼隊の總實員二大隊足らずの歩兵と機關銃六挺を三分したのであるから、其力は何れも非常に微弱になつて何事をも成し得ない樣になつて仕舞た。ては若しも評者が此場合に處したならば何とするかと仰しやるか、然りこれは中々の難問題であるが手前が山中少將であつたならば、一大隊と二中隊缺けたる歩兵第四十四聯隊を纏めて其聯隊長石原大佐に指揮せしめて、それに機關銃四挺を屬し其全力を擧げて、此方面陣地の鎖鑰たる南山南方七六四の高地を夜間に其直下迄近接し。拂曉と共に一擧にこれを略取せしめて、其他歩兵二中隊、騎兵一小隊、工兵一中隊(一小隊欠)を豫備隊として、西溝西北方高地を占領して石原大佐の後援となると共に、併せて閏家嶺方面を警戒せしめる。さて石原大佐が都合よく拂曉迄に此の南山南方の敵を驅逐して、拳下がりに閏家嶺の敵の右側から攻撃を始めたならば。砲兵第五中隊をして拂曉と共に猛烈に閏

家嶺の敵を砲擊せしめ、豫備隊は石原大佐の右翼に其一部を進出せしめて、相協力して閭家嶺攻擊を援助するのがよいと思ふ。而して要すれば砲兵の掩護の爲めには工兵中隊をこれに當て、又西部富成峪南方の山上の敵に對しては騎兵小隊に其方面を警戒させるの外はあるまい。斯くして萬一にも敵の爲めに喰ひ止められ戰不利となつた場合には、西溝北方の高地附近に其全左翼隊を集結して、此所で必死に敵の前進を拒止するより他には策がないと思ふ。此樣な場合にやたらに兵力を分割するのは實に危險千萬自滅に陷ると同樣であると評者は思ふが、何分にも餘りに此の左翼隊の兵力が少ないので、山中少將も此樣な窮策をとられたものであつたらふ。斯く論じて來て見ると前田少將に徹夜をさせて轉進さしたる此左翼隊の、餘りに其力が貧弱に過ぎて其效能が顯はせなんだのは、歸する所は鮫島閣下の部署の罪といはねばなるまい。

さて南山南方の敵を奇襲せんとしたる石原大佐は、二十四日の午前零時十

五分南部富成峪を出發して、西溝南方の斜面に沿ふて庄田少佐の五小隊を前衞として前進を始めたが、此の庄田少佐の前衞は敵に遭遇せば直ちに突擊せよといふ嚴命で、枚を銜んで肅々として前進したのであつたが。此斜面には殆んど道路がない上に山は嶮しく雪は深く、諸中隊は悉皆一列側面縱隊となつて困難を極めつつ潛行したが。西部富成峪の東南二百米突に達したと思ふ頃、前に居た敵の小部隊は我夜襲を報ずる爲めに、數回の射擊を行ふたる後退却したと見る中に。全く思ひがけなく此鞍部の南方高地から敵三四十の射擊を受け、又敵の燈火を携へたるものが、標高八七二高地に登つていつたのを目擊した。

暗中突然敵の射擊を受けたがこれは元より豫期したことであつて、前衞は直ちにこれに向つて命令の如く、遮二無二突擊すれば敵の充分に仕度の出來ぬ中に、或は其陣地内に進入することを得たかも知れぬが。豫期した南山南方に達せぬ中に敵の居らぬと考へて居た思はぬ左方の高地から不意に射擊さ

れ、更に其左の高地へ燈火を携さへて登つたものがあるのを見て。これ等の敵を打ち棄てて自分が目的とせる南山南方高地へ向つて進むといふことは、非常に思慮に富んだる勇士でなくては、決して〳〵容易に出來る筈のものでない。庄田君の尖兵は先の嚴命を忘れて仕舞て突擊所の沙汰でなく雪中に伏して應射を始める、庄田少佐はこれも少しく狼狽氣味で步兵操典第二部第百八十四の

『何レノ場合ニアリテモ敵ノ直前ニ於テ隊形ヲ換フルコトヲ避クベシ是レ敵ヨリ發覺セラレ終ニ混亂ヲ生ズル虞アレバナリ』

といふ戒を忘れて前衞を一度其後方に開進して敵の居る鞍部南方の高地へ向つて進んだが。土地が凍結して居る上に急峻極まる斜面であるから、其行進は非常に手間どれる敵は無暗に射擊する、味方の死傷算なしといふ大苦戰を先づ劈頭第一にやつて仕舞た。此射擊の音で敵と衝突したのを知りたる聯隊長石原大佐は、其方向が自分の目指していつた南山南方とは、大に方角が

違ふなどといふことには氣が著かずして。これも亦其全力を此の鞍部南方の高地へ向はしめて、愈〻益〻苦戰を重ねるといふ羽目に陷いり、終に此の富成峪西方の鞍部の南方高地の死角の下で、二十四日終日此石原大佐の部隊は、全然貧乏搖ぎも出來ぬ樣な悲慘極まる見じめな目に會はされて仕舞たのであるが。これ其原因を源に溯のぼつて調査して見ると外でもない、太子河谷の順禮が無益に時間を費やした上に、此の左翼隊の諸隊長も熱心に敵情を偵察せず、又これを充分に搜索するの餘裕も時間もなかつたので。形ばかりの若干の部隊を以て敵の陣地を偵察せしめて、其不充分なる偵察を以て早計にも山中少將は閻家嶺から南山南方鞍部迄より南には、全く敵が居らぬものと判斷したのが抑〻の間違ひて、此奇襲を目的として前進したる石原大佐は。確かに敵が居らぬと思ふて進んで居た、自己の進路が其斜面に沿ふて通じて居る此山の上から、猛烈なる射擊を不意に頭の上から雨注されたのであるから。左なきだに混雜したり錯誤を生じたりし易すい夜中である、忽ちにして隊伍は

亂れる指揮は届かぬといふ大騷動を演じつつ敵に肉薄して見ると。思ひがけない所に居た敵は又思ひがけない堅固な鹿砦や鐵條網を、その塹壕の前に嚴重に設けて居たのでこれはとばかり躊躇する所へ。有效猛烈なる近距離の射擊を浴せられたので全く志氣が沮喪して、其敵壘下の斜面の死角の樣になつて居る雪の中に、敵火を避けて「ダニ」の樣に喰ひ込んで仕舞たのであつて。石原大佐、庄田少佐の夜襲のやり方も拙なかつたが、第一番に昨日の敵情の偵察が不充分であつたのが、抑〻此の大失態を起すの大原因である。陣中要務令第六十九に曰く『前略敵ト愈〻接近スルニ從ヒ益〻周密ナラシムルヲ要ス殊ニ敵ト衝突スル時機切迫セルトキハ敵ノ戰術上ノ部署ヲ成ルベク精密ニ偵知スルコト必要ナリ』と明記してある如く、戰術上の部署の中でも敵の一翼が何れにあるかといふことを知るのが、最も大切なることであるのは何れの戰術書でもこれを唱道せぬものはない。即ちそれは其一翼のある所を誤認して輕率に攻擊でも始め樣ものなら、現在此の石原大佐の部隊の如く忽ちにして三方よりの

包圍に陷り、進退ともに二進も三進も出來ずして、全く進退度を失なふといふことになるのは目前であるから、それで敵の一翼のある所を知るのが最も必要であるのである。

左翼隊では此の石原大佐の奇襲の仕損じが始まりて、奇襲は變じて全くの拙襲となり權藤少佐がこれを救援する目的を以て南山南方高地を攻擊して見たが、これも敵壘下の死角へへばり付いて動けぬといふ運命に陷つて仕舞た。此日此の富成峪方面の戰鬪は全部が全く批評以上の失敗で、實に散々なる目にあつたのであるが、聞く所によると其原因を多くは石原大佐の腰の弱いに歸するものが多く、頗ぶる同大佐は此一戰で豫ての評判を全然零にして仕舞たが。勿論同大佐も隨分其やり方が餘りに勇氣を缺いて居たには相違ないが併しながら抑〻の失敗原因を尋ねて見た時には、一體に此の左翼隊の兵力が非常に寡弱に過ぎたのであつて。師團の豫備隊からは容易に加勢の出來ぬ此方面へ、旅團長が來て居るとはいへ歩兵二大隊、砲兵一中隊といふ小部隊を孤立

せしめたのであるから。我よりも優勢なる敵の守れる國家嶺に對しては、此様な無理算段をせねば到底攻撃は出來ぬが當然である。其上に偵察が不充分て其不充分なる敵情を根據として、誤まれる敵情判斷をなして敵の一翼といふ考を以て、敵の右方の中央に向つて奇襲のやり損じをして、敵の包圍に陷つて仕舞たのであるから。强ち此敗戰を以て其罪を全く石原大佐一人の勇氣に歸するのは、評者は少しく過酷ではあるまいかと思ふのである。

乍併此日此の雪中に一日間、頭もあげられぬ様な窮屈な目に敵から壓迫せられて、其日の暮れるのを一日千秋と待ち兼ねたる後。日沒後に命から〴〵逃仕度をして、露軍が到底勝利の見込立たずとして其全體を引きまとめて、清河城以北へ退却して仕舞たる後に於て。風聲鶴唳どころの沙汰ではない空虛なる敵壘に對し戰々競々として反對に、南部富成峪へ向つてこけつまろびつ退却した上に。此の石原大佐部隊を掩護したる權藤少佐迄が、二十五日の午前四時敵が清河城以北遠く數里の地に退却した頃に、それとは夢にもうつ

つにも知らずしてこれも同様富成峪に退却したに至つては實に維盛以上である。此の晝間の苦戰惡鬪よりも、此の終日の雌伏蟄居の極めて意氣地のなかつた見つともなさよりも。評者は此の敵の一人も居らぬ西部富成峪鞍部南北高地に無暗やたらと敬意を表して、敵が果して居るか居らぬかを唯の一度も確かめずに、ほう〳〵の體で全左翼隊擧つて逃げ出した其有様が、滑稽でもあり腰拔けでもあり腑甲斐なくもあり、實に何といふなさけないことをしたものであらふと慨嘆に堪へぬ。此様な爲體をする人々が昨日も敵情を偵察したのであるから、全然敵情を誤判するに至つたのも無理はあるまい。宋襄の仁といふことは何でも唐人の寢言にあると聞いたことがあるが、此のお互様にお辭儀をして退却するといふ滑稽も、何れ後世に少し口調はよくないが石盧の謙退とか權傳の辭讓位の名が付いて、間拔け腑拔けの標本として後々の時代まで、其恥つらをさらすに充分なる失態であると評者は信じて疑がはぬのである。いひ後れたが此様な弱蟲どもの多い此の二三日間の雪中戰に於て、

彼の白石大尉の夜襲隊が二十四日に歩兵第四十三聯隊から第六中隊の增加を得て、孤立して此の清河城東南高地を占領して、一度敵の優勢なる逆襲の爲めに山の下まで逐ひ落されたが。それでも頑强に其山下に據つて容易に其地を棄てずして、終に他に先だつて此の露軍の砲兵山を占領したのは、天晴れ勇者である選拔兵の決死隊たる價はある。これからして考へて見ると此の石原大佐部隊は、確かによく〳〵の腰拔けどもばかりの集合であつたと見へる。赤澤少佐が午後九時に清河城へ進入して敵兵の全く居らぬのを確めたと相前後して、石原大佐の部隊は狐鼠々々殆んど喪家の犬の樣な有樣で、南部富成蛤迄御苦勞千萬にも退却し。更にそれから七八時間も遲れて我こそ殿りなれと力むて御座つた權藤少佐殿が、何等敵が自分の前に居るか居らぬかを確めもせずに、これ又びく〳〵ものでで退却を決行したなぞは。全く以て滑稽の至抱腹の極てあつて、實に話しにも繪にも此樣な馬鹿氣たことはかけぬのてある。

思はず大分に筆が皮肉に走り過ぎたが、雅量に富める關係ある方々何卒お腹をたてられな、これもつまる所は國軍將來發達の爲めに忌憚なき苦言を呈したのて、決して〳〵毛頭惡意のある次第ではないのてある。筆が皮肉になりかけた序を以ても一つおまけをさしあげるが、敵は此の日三家子南方高地の陷落と共に、到底此の地の防禦をしほせぬことを知つて退却に決したが。我鴨軍司令部に於て此樣な敵の內事の知れ樣筈なく、到底清河城奪取は難かしいから二十四日は此儘に夜を徹して、更に翌二十五日を以て攻擊を繼續せんとして、其命令を下してから暫くすると敵の退却する模樣が知れて來たので、更に此日に於て攻擊を續行するの命令を下したが、此樣なことは評者は頗ぶる不同意てある。此命令は下しは下したものの殆んど何等の效もなく、一時宿營の準備をした諸隊を徒らに混雜せしめたに過ぎぬ、これは極めて愚の極てあつた拙の極てあつた。若しも此日に於て敵を壓伏するのが到底困難てあると考へたならば、別に餘計な命令を下すことなく其儘て戰鬪を繼續せ

しめるがよいのである、左すれば各師團は適當に處置をするのは知れて居る。斯くして置けば敵が退却した方面は前進するであらふ、敵が頑守した方面はこれと對峙するであらふ、よし命令を下した所で其結果はこれと同一になるのは定である。此の呼吸をよく〳〵のみ込んで居らぬ軍參謀部が、過早に宿營命令を下して其あとで敵のひき色あるを見て、泡を喰つて更に前命令を取り消して攻擊前進を命じたのは、これ實に軍の威信を失墜すべき極めて拙ないやり方であつたと評者は信ずる。今一つおまけに申上げて置きたいことは、第十一師團の集中も終らぬのに急ぎに急そいで、二月の二十二日から清河城の攻擊を始めたのは、いふ迄もなく奉天會戰開始迄に敵を此方面に牽制し樣といふのが眼目で、それで隨分無理なる戰鬪をも强行せしめたのである。然るに何事ぞや此の二十四日の夜に敵が隨意の退却を行ふたのを見て、猛烈迅速にこれを追躡し樣とせずして、悠然と二十五日は清河城附近で一日の褒賞休暇をやつたのは何といふ矛盾であるか。軍參謀部の考へる所では大分無理な苦戰もやらせたから、此一日に於て隊伍の整頓もさせ樣し、又其間を利用して軍司令官に諸團隊の巡視を願ふて、其戰勝と勇氣とを賞贊激勵してもらつて、今後の爲めに大に勇戰の礎を築かんとしたのではあらふが。それ程の餘裕があることなれば此攻擊開始を實は一日繰り下げてもらいたかつた。左すれば追及すべき增加部隊もあつた上に、第十一師團特に其左翼隊などは今少し兵力も多くすることが出來て、萬事萬端極めて手筈が整ふべき算用であつたのである。それを前には非常に急そいで置きながら、其攻擊が曲りなりにも成功すると共に褒賞休暇を與へたのは內山參謀長閣下、鑄方參謀副長殿、あれは少しく穩當でないと思ふがいかがなものて御座る。但し此一戰が非常に敵總司令官クロパトキンの決心を動かして、全く我が乃木第三軍が此方面から進來したと信じ切つて、其大豫備隊を此方面に赴援せしめるに至つたのであつて。此樣な牽制の大目的を達成したのであるから、一日や二日休んでも少しも支障あるまいと。如何にもそれは仰せの通りである御尤千萬である、

が併し其牽制の成功したといふことは、奉天會戰が終つて後遙に日を經てから、始めてこれを知り得たのであつて、まだ此場合何人もこれで充分に牽制の功を奏したとは思はなんだ。否々充分所か不充分迄にも至らぬと各自が思ふて居たのは事實である。であるから此場合二十五日一日休むといふのはいかにしても道理に合はぬやり方である。が併し當時の鴨軍參謀部は實に英雄揃であつたから、『英雄囘首即神仙』といふ詩のある如く、此參謀部が神樣の樣に仙術に通じて居て未來の事を明白に知つて、さうして休暇を與へたといふ次第なれば、これは評者の樣な凡俗には到底思議すべき限りでないから、默して拜神の敬禮をするの外はない。多分參謀部が神通自在になつて將來を洞察したのであらふ、『でも恐ろしい眼力よなァ』

露軍に就て少しく意見を述べて見ると、榛子嶺附近の戰鬪に於て日軍の兵力を步兵八大隊、砲約十二門と判斷したるアレクセエフ中將は、二十二日威力偵察を行なへる結果其兵力の增加せるを知り、これを步兵十二大隊、砲二十門と判斷して、清河城陣地に據つてこれを防禦するに決心した。此決心は評者も至極同意である、此場合此處置を執るの外には良策はないと思ふ。但し此の清河城の陣地は堅固ではあるが、一方から考へると其正面は露軍の兵力に比して過廣である上に、何れの方面も此陣地の前方には高地隆起し山岳重疊して、敵の行進運動を蔭蔽する樣になつて居るので。防者の爲めには大に不利益である而已か、就中最も大切なる日軍進路の北側を扼せるデニキン山は灣柳河北方高地と連續して居て、近接困難ならざる上に敵方から瞰制せられるので、此方面には砲兵を充分に使用することが出來ぬ。小銃射擊は先づ先づ何れの方面も相當に利益ある射界を持つて居るけれども、我進路の南方に聳へたるペレスネフ山は南部富家樓子北方高地から、僅々二百米突の射程を有する而已で、此方面の最重要地には何れも缺點があつたのである。又問家嶺の方は先づ〳〵敵の近接に對し十字火を充分に御馳走が出來る樣になつて居たが、何分にも正面二十露里といふ廣大なものを、極めて手薄なる步兵十

七大隊、騎兵十七中隊、砲三十門を以て守つた上に。各地區は各個各別地區毎に分斷して、相互に相救援加勢することが出來ぬ地形であつたから、到底長時日間これを守ることは困難であつた。まして況んや地形が攻勢に轉ずるに不便なりしと、葦子峪から撫順に通ずる近い道路があつて其左側を迂回せらるるの虞があつたので、『撫順鐵嶺間ノ道路ヲ掩護ス』といふ此隊の主要任務遂行には適應して居らなんだのである。

乍併二十二日の偵察で防禦の決心の臍を堅めて、二十三日、二十四日の兩日大雪中の嶮山の間で、寡兵を以て我鴨軍を散々に苦しめた手際は、確に水際だつて居つたと思ふのは評者ばかりではあるまい。而して二十四日唯一の特みとせる三家子南方高地のペレスネフ山が陷落して、更に其北方高地も到底これを持ちこたへ切れぬといふ場合に至り。即ち二十四日午後三時三十分に於て大嶺に退却するに決して、日沒と共に極めて靜肅に其部隊を集結して、日軍の追擊を被むることなく退却を任意に決行したのは、確にアレキセエフ中將の手腕を見るに足ると思ふ。が併し餘りに日軍の左翼迂回を恐怖したる結果、西川嶺方面は既に日軍の占領に歸せりとして、左翼隊が本隊と同一道路を混淆して退却するに至つたなどは、全く吹きすさむ臆病風の然らしむる所といふを得べく。日軍を歩兵二十四大隊と判斷し、それが旅順新勝の餘威に乘じて清河城を壓迫すると考たる中將は。これだけの大兵力を引受けてなまじい遠方で、頑强なる抵抗をやつて居る中に、左方から迂回されて露の滿洲全軍の左側背を危くする樣なことがあつてはならぬと大事をとり、漸次退却しつゝ此新來の日軍を歩々防禦せんとする策に出たのであつて。これは實際此樣なやり方の外には別に好手段はないと思ふが。此の中將が第十一師團と第一師團といふ二つの同じ名の爲めに、それが膽氣ながら後備兵であることをも知りながら、全く乃木第三軍の進來と誤判したのは大なる過失で。此過失は頗ぶる此方面の日軍を輕視して居たるリネウイッチ大將を驚かし、次で更に總司令官をして愈〻其豫備隊を此方面に赴援せしむるに至つたのは、こ

れ全くアレクセエフ中將の敵情判斷の誤まりが上級司令官に傳染したのであつて。此判斷を誤まつたのは實に此の中將の責任決して輕くはないが。併し又此の中將をして全く乃木軍剩到せりと思はせる樣に、七里以上に亘る過廣至極過大千萬なる正面に、思ひ切つてまだ充分に集中も補充も出來て居ぬ第十一師團と後備師團をばらまいて。其砲兵の如きは全く普通の使用法を無視し殆んど全體を二門又は四門といふ樣な、極々の小部隊に分割してこれを使用して。彼れ有爲なるアレクセエフ中將をして大兵力の北進を信ぜしむる樣にしむけて、其上に猛烈果敢無二無三に攻擊を決行したので。その有樣の烈しさと大仕かけなのとに辟易したる敵將は、全く我川村軍司令官の御膳立を甘々と一杯御馳走にあづかられたのであつて。此點から考へて見ると萬の缺點も千の過失もないではないが、併し豫定通りに敵大兵力を此方面に牽制するといふ、最大目的を充分に達成したのであるから、綜合的にこれを評論して見れば確かに此の川村將軍の作戰は大成功である。けれども此の成功を得

んとして其攻擊を急そいだ爲めに、其細部に於ては錯誤百出拙ない戰をやつたのも亦決して掩ふべからざる事實である。やれ〳〵ちやん式筆法を用ゆれば流汗淋漓ともいふべき汗の出る樣な今日此頃、此樣な寒むい〳〵雪中戰の研究さぞかし讀者諸君も變な心持がして定めつ御退屈さまであつたらふ。評者は更に其上に慚愧の冷汗が加はるのであるから實に堪まつたものでない。其代り今度といふ今度は今迄の埋め合せに新に筆硯を一洗して、目のさめる樣な面白い所を腕ッこきて一つ、來月に於てお目にかけることにし樣と思ふ。

塞上曲

無名

破氷飲我馬。　把雪磨我刀。　沙場萬幕列。
處々見空壕。　前日清河戰。　偉勳千古高。
今經新戰地。　碧血染寒蒿。

大正四年六月二十一日印刷
大正四年六月二十三日發行

戰史評論奥附

著作者　無名戰士
東京市麴町區平河町四丁目十一番地
發行者　宮本林治
東京市赤坂區田町五丁目十一番地
印刷者　山田三次郎

發行所　東京市麴町區平河町　宮本武林堂
振替口座東京一〇九一二番
電話番町五五一八番

不許複製

豫告

七月刊行
戰史評論

分水嶺の戰鬪

大正四年七月（分水嶺附近戰鬪　上）

戰史評論

大正
4. 7. 31
内交

宮本武林堂發行

戰史評論

成仁武夫補
無名戰士評

第二十六回　分水嶺附近の戰鬪　上

獨立第十師團の分水嶺の戰鬪は、兵力は多くなかつたが其規模頗ぶる壯大にして、又其經過も頗ぶる巧妙に進捗したる好攻擊戰例であるから、これから此の分水嶺に於ける川村元帥の戰鬪に就て研究するつもりであるが。此戰鬪には隨分と面白いことが多いと思ふので、少しくこれを詳細に研究する爲めに、二回に分つて評論するつもりであつて。即ち此の第二十六回に於ては六月二十六日夜に至る迄の、攻擊準備の諸動作を研究することにして。更に來月に於て同二十七日に於ける分水嶺の攻擊を評論する豫定であるから、讀

者諸君も其御考を以て最も詳細に戰史を研究して置かれたいのである。

南尖子に上陸したる後淺田支隊と相協力して、岫巖附近の敵を北方に擊退し同地及び新開嶺一帶の高地を占領したる第十師團長川村景明中將は。淺田支隊をも一時其指揮下に加へて、頻りと前進の準備を整頓して居つた六月二十三日、今度新に大命を拜したる滿洲軍總司令官元帥侯爵大山巖閣下の隷下に入ることになつたのである。そこで此の川村中將はまだ大山總司令官の隷下に入らざる數日前に於て、大本營より受領したる訓令に基づいて分水嶺を占領せんとして。丁度其前後に得たる第一及び第二軍司令官の通報によつて、兩軍ともに六月二十三日に運動を起して。第一軍は賽馬集西方四里の六道溝から、崗草甸子を經て連山關南方四里に當る、高家堡子の線に二十六日迄に達せんとし。又第二軍は此の二十三日に於て李官村河の線を占領せんとする計畫であることを知つたものであるから。此の兩翼にある友軍に策應して第二軍が蓋平に到著する頃に、此の川村師團も進んで分水嶺を占領せんとして。兩友軍の今後の運動を大に研究したる後、六月二十四日の午後四時に至り左の如き要旨の命令を下したのである。

一、近衞歩兵一旅團、同騎兵二中隊、同砲兵二中隊、砲兵第十聯隊ノ二中隊(計砲二十四門)近衞工兵一中隊、工兵第十大隊一中隊(計工兵二中隊)ヨリ成ル淺田支隊ハ二十六日先ヅ王家堡子附近ヲ占領シ二十七日正面ヨリ分水嶺附近ノ敵ヲ攻擊シ一部ヲ以テ楊胖溝方向ヨリ敵ノ退路ヲ脅威スベシ

二、歩兵二大隊(一中隊欠)、騎兵一分隊、砲兵一中隊、工兵一小隊ヨリ成ル鎌田支隊ハ二十五日午後運動ヲ起シト家堡子、東瓜川ヲ經テ前進シ淺田支隊ト連絡シテ大桑皮嶺方向ヨリ分水嶺附近ノ敵ノ右翼ヲ攻擊スベシ

三、歩兵四大隊、騎兵一中隊半、砲兵一中隊、工兵一中隊(一小隊欠)ヨリ成ル丸井支隊ハ二十五日運動ヲ起シト家堡子、魏家大嶺ヲ經テ前進シ二十六日一部ヲ以テ接官听西方高地ヲ占領シ主力ヲ以テ同地以東ニ宿營シ二十七日有力ナル部隊ヲ以テ夾山勾北方二千米突標高五三六附近ヲ占領セシメ主力

ヲ以テ北方ニ轉進シ三道溝方向ヨリ分水嶺附近ノ敵ノ退路ヲ脅威スベシ

四、歩兵四大隊、騎兵一中隊、砲兵二中隊、工兵一中隊ヨリ成ル東條支隊ハ二十六日其一部ヲ以テ老盤道嶺、嵐崗嶺及新開嶺ヲ守備セシメ主力ヲ以テ周家庄東方高地ヨリ仙家峪西方高地ニ亘ル線ヲ占領シ下哈塔方向ノ敵ニ對シ丸井支隊ノ轉進ヲ掩護スベシ

五、歩兵一大隊ハ總豫備隊トナリ二十七日王家堡子ニ前進シ他ノ歩兵一大隊ハ岫巖ヲ守備スベシ

此師團命令は大體に於て略〻同意であるけれども、其中二、三の評者の意圖に合せざる點を指摘してこれから研究して見樣。第一項に於ける諸運動及び諸計畫は適當に出來て居ると思ふ。これは斯く命ずる外には方法があるまいと評者は信ずるが。第二項の鎌田支隊の出發を二十五日の午後としたのは何の爲めであるか、敵は王家堡子から北嶺を經て大木溝峪に亘る線を占めて居る。然るに丸井少將の支隊は此の敵を近く右側に置いて、一里乃至二里の敵前を側敵行をやるのであつて、隨分と危險なる大膽至極なる計畫であるのは何人も否認すまい。果して然りとすれば此の丸井支隊の出發よりも鎌田支隊の出發を先にして、せめては王家堡子方向の敵が此丸井支隊の側面を窺ふといふ危險だけでも防いでやつたならば、幾分か此の丸井支隊の側敵行軍の危險を薄くすることが出來る筈である。此點から考へて見ると鎌田支隊を二十五日の早朝から運動を起させて、それより稍〻遲く丸井支隊に運動を起させるのが至當である。然るに實際に於てはそれが全く反對になつて居るが、これは何づれ各隊の宿營地か何かの關係から斯くなつたのではあらふが、評者は此の第二項の出發時刻の示し方が至當でないと思ふのである。又第三項の丸井支隊の運動は頗ぶる大膽千萬で、約六里の間近く敵を其右側に置いて行軍をする而已か、接官所附近に到著したる後は殆んど三面に敵を受けるといふ位置に立つのであるから、此支隊の行動は實に非常に危險なるやり方の樣であつたが。萬全の策のみを考へて居てはとても大戰勝を得ることは出來ぬから、

これ位の果斷の處置をするの勇氣がなくては、驚天動地の勝利を獲得することは到底不可能である。勝利の見込みがある以上は隨分と危險を冒すの覺悟がなくては名將とはいへぬのであつて。非常の功は非常の計畫にして始めて收め得られるのであるから、此の丸井支隊に思ひ切つた行動をさしたのは評者は大に贊成である。此支隊の勇敢なる大膽なる行動があつたればこそ、あの堅固なる分水嶺も容易に我手に入つたのであると評者は思ふ。で此の丸井支隊の行動を命令したる第三項は、少し突飛な樣には見へるが評者は全然同意である。

更に第四項に於て東條支隊の一部を以て、我師團の側背に敵の侵入するを防ぐ爲めに、堅固に新開嶺一帶の高地を守備せしめて、其主力を以て仙家峪方面の敵に向つて前進せしめて、此の支隊をして二十七日に丸井支隊が北方に轉進する場合に其背後を掩護せしむるの任務を與へたが、これも實に至當なる計畫であると評者は思ふ。更に殘餘の步兵二大隊の中一大隊を師團の總豫備隊としてこれを王家堡子に進め、他の一大隊を殘して根據地たる岫巖を守備せしめたがこれも全然同意である。此場合師團を非常に廣い正面にばらまいたのであるから、よし師團長が多數の豫備隊を控置して居ても、それが機に應じて諸方面に赴援することは到底不可能である。からして師團の總豫備隊を極めて少くして、それから得ただけの兵力を豫め各支隊に最初から增加して僅かに一大隊を以て正面攻擊に當る淺田支隊の後方から進ましたのは最もよろしい。而して他の一大隊を岫巖の守備に止めたのは少しく用心に過ぐる樣であるが、敵には騎兵が非常に多い上に蓋平の方からは、既に數日前からミシチエンゴ騎兵支隊が岫巖を狙らつて居るのであるから。これが爲めに東條支隊の一部を新開嶺に止めたけれども、更に此の大切なる師團の根據地を直接に防禦するの必要は充分にある、からして此所に一大隊の步兵を止めたのは大に評者の意を得て居る。全體に於て此命令の指示したる計畫は鎌田支隊を丸井支隊より先に出發せしむるといふ一事の外は評者は、全然同意

てあつて頗ぶる適當に且つ頗ぶる巧妙に組立てられて居ると思ふ。此戰こそ實に此の作戰の計畫の巧妙なりしによりて大勝を得たものであつて、力押しに無理やりに勝つたのではないのであつて、此一戰の計畫だけでも川村將軍を元帥にする價値が充分にあると評者は思ふ。何に誰れだ陰口を聞くのはおべつかやお世辭は評者は生來大嫌いだ、若しも此の計畫が川村將軍自己の御考にあらずして、當時の師團參謀の献策になつたものとすれば、それは其師團の參謀長が元帥になる價値があるのである。評者は唯表面の代表者たる川村將軍を稱賛したのであつて、個人たる川村元帥におべんちやらをいふたのではないのである。

此巧妙なる計畫が其幕僚から出たものとすれば、當然其稱賛の中心となるべき人物は故黑澤源三郎少將である。彼れは隨分と灰殼であつて矢鱈に舶來を誇る人間であつたのは事實であるが、併し一面には確かに立派な腕のある好將軍であつたが。大分に第四軍參謀長の上原將軍に睨らまれたものである

から、奉天會戰の沙河陣地に於ける第十師團の戰鬪で、無益に澤山な人を殺したといふ責任を一身に背負はされて、氣の毒千萬にも聯隊長に左遷の非運に出會したが。これ實に極めて無理なる責任の負はせ方であつて、彼は此の間の消息を涙を呑みつつ半日を費やして評者に話したことがあるが。彼れのまだ〳〵將來ある年齡を以て軍職を退ぞけられたのも、其原因は此の奉天會戰の無理責任が原因であつて、彼れが五十になるやならずの年齡で死んだのも、全くこれを憤死と見るのが至當であると評者は信ずる。此分水嶺攻擊の計畫が誰れの考案であつたかは元より評者は知らぬ、からして其代表者たる川村元帥を大に稱賛したのであるが、若しもこれが幕僚の獻策に出たものとしたならば、即ち彼の無能の名の許に旅團長も勤まらぬとして退ぞけられたる、彼れ黑澤源三郎少將は確かに元帥たるの價値があると思ふ。但しこれは其人格や其性質の上からいふのては毛頭ない、其戰術的の技能に於ては元帥たるに恥ぢないといふのである。ほい〳〵これは思はぬ所で脫線して飛んだ

議論を始めたが、彼れ黑澤少將が人に嫌はれるたちであつたのは自分も知つて居るが、去りとて豫備にする程な凡愚等では決して〳〵なかつたのであるから、それを今少し使役して其本能的伎倆を發揮せしめたならばと惜しむの餘り、此樣な大脫線をやつて仕舞たのは讀者に對して申譯がないが。併し評者はお世辭は大嫌いであるから、それだけは確かに此所に斷つて置く次第である。

川村師團長が六月二十四日の午後四時に、前述の命令を下して仕舞たその直きあとの午後十一時に於て、旅順の敵艦隊が我が海軍の封鎖を破つて港外に飛び出した爲めに、第二軍の糧秣輸送が頗ぶる不確實となつて仕舞たので。遼陽附近の會戰を滿洲の雨季後に於てすることに總司令官から豫定を變更して來た上に、第二軍司令官からは其延期後の運動再興の期日すらも、今から決定して置くことは出來ぬといふてよこすといふ羽目になつたが。僅か五、六時の時間の遲速で既に攻擊の命令を下達して仕舞た川村將軍は、此の難局を

如何に解決せんとしたかこれが實に大に研究するの價があるのである。

第二軍が蓋平の方へ前進せぬのに、此の第十師團が孤立して分水嶺を占領するといふと、此の師團だけが右に居る第一軍よりも左にある第二軍よりも、遙に遠く敵方に突出して獨力で敵を引き受けねばならぬ。左すれば如何なる苦戰をやらねばならぬかも知れぬ。然るに第二軍の前進再興の期日は殆んど無期延期の有樣であるから、これ隨分と熟慮を要すべき場合であつて輕率に飛び出しては、如何なる後難がふつて來るかも知れぬのであつて。大概のものならば此所で一躊躇する所であるが、流石にそこは川村元帥である、決然として獨力を以て分水嶺攻擊を決行する覺悟を定めた。これが實に評者は大に氣に入つたのである、此場合此の命令を取り消すことはさして困難ではなかつたのである。何故なれば此命令を下してから僅々時間が七時間しかたたぬ午後十一時に、其變更命令が到達したのであるから、此場合急使を發して其運動を中止せしめたならば、決して命令の取消しが出來ぬことはなかつた

のである。それに其攻擊の當日は中二日を置いた二十七日であるから、更に此の命令の取り消しは容易であつて、結局明二十五日の中に運動を起すべき鎌田支隊と丸井支隊の一部が、少しばかり準備運動にかかつた位のもので、他は殆んど此の命令の實施に未著手て居たのは事實であるから。此場合此命令を取り消して一時前進を中止し、友軍の運動再興と共に此攻擊を決行する樣にするには大なる支障はなかつたのである。

然るにも關せず川村元帥は斷然として此攻擊を決行した、戰史にはこれを以て諸隊が既に其準備にかかつたから中止することが出來ぬ、それで已むを得ずして此の命令を實行したとあるが、評者は大に其見る所を異にするのである。いてや今から自分の考たる所をここに述べて諸君の意見をお尋し樣。第一第二軍の中間に介在して居る此の獨立第十師團が、進んで分水嶺を占領することになると其師團自身は、孤立敵中に突出するといふ形狀になるのて種々なる危險の伴なふのはいふ迄もないが。併し此の川村師團の前進した爲めには、敵の南進せる兵團即ち第二軍に對する敵は、近く其左側背を脅威せられることになるから、頗ぶる其大擧南進の都合が惡るいのはいふ迄もあるまい。更に又我第一軍に對する敵の東部兵團の方に於ては、距離は稍遠いけれどもこれも其右側背を此師團から脅かされることになるのであるから、此の獨立第十師團の前進は敵にとつても非常な苦痛なるはいふを俟たぬと評者は思ふ。此樣な大なる利益があるのであるから川村元帥は危險を冒して決然として、友軍狀況の變化に關係せずして前命令を斷行したのである。戰史は『諸隊既ニ準備運動中ニシテ今ヤ中止スベカラザルヲ察シ』と記述して居るが、事實明二十五日に運動を起すべきは丸井、鎌田の兩支隊而已であつて、これが明朝出發の爲めに多少の準備をしたからとて、それが爲めに敵中に孤立するといふ樣な危險を冒して迄も、是非とも此命令を決行するの必要はないのであつて、友軍の狀況に應じて中止することは決して困難なる場合でないのであつた。であるから川村元帥が此の夜前命令を斷行するに決して仕舞たのは、

決して戰史の記述して居る樣な單純なる理由ではなかつたのである。

前にも述べたる如く分水嶺の占領は、確かに川村師團の爲めに孤立敵中に突出するの危險はあるけれども、それと同時に敵の東部及南部兩兵團の側背を脅威するの大利益がある。からして多少の危險は冒してもこれを斷行するの覺悟を定めたのである、單に諸隊の準備運動が始まつたから止むなくこれを決行したのではないのである。且つや師團長は左右にある兩友軍の狀況と、更に前方分水嶺及び仙家峪の兩方面にある敵の狀況とを知つて、十二分に熟慮をなして此の計畫を立てて命令を下し、既に其命令が部下の一部隊に實行せられつつある二十四日の午後十一時。急に友軍の狀況の變化した爲めとはいへ折角の計畫を其儘中止して仕舞のは、非常に遺憾千萬なることでもあるし又一方から考へると、此の最初の大規模の戰鬪に於て忽ちに既定命令を取り消して、其攻擊を中止するといふ樣な不祥なことをすると、軍隊の志氣を非常に沮喪せしめるの大損があるばかりでなく、此命令を下したる川村元帥は幾分たりとも其部下から信用を失なふことになる。但しそれも前命令を決行すれば友軍狀況變化の爲めに、利益は少しもなくして危險ばかりが增加するといふ場合なれば、假令多少の威信を失墜しても已むを得ぬ、斷然これは前命令を取り消すのが至當であるが。危險と共に敵の側背を脅かすといふ大利益もあるから、そこで勇猛にして果敢なる川村師團長は、どこ迄も前命令を遂行することに決心したのであつて、これは戰史の記述し方が餘りに單純に過ぎると評者は思ふのである。

歩兵操典第二部第三に曰く

『高級指揮官ハ諸情報ト自己ノ觀察トニ依リ戰鬪一般ニ關スル決心ヲ定ム(中略)之ガ爲メニハ周到ナル思慮ト迅速ナル決斷トヲ要ス戰鬪ノ效果ハ一ニ懸リテ其當否ニ在ルモノトス』

同第四に曰く

『凡ソ戰鬪ニ關スル各級指揮官ノ決心ハ任務、地形及敵情ノ判斷ニ基クモノナ

リ然レドモ任務ハ決心ノ基礎ニシテ地形ノ不利、敵情ノ不明等ニ依テ躊躇スベキモノニアラズ

指揮官ノ決心ハ須ラク堅確ナラザルベカラズ決心動搖スレバ指揮自カラ錯亂シ部下從テ遲疑ス』

以上諸條の示す所を參酌して考へて見たなれば、充分に思慮を盡したる上に決心を定めて下したる命令は、決して容易にこれを變更すべきものでないことは頗ぶる明白であつて。若し猥りにこれを取り消したり變更したりした場合には、『指揮自カラ錯亂シ部下從テ遲疑ス』といふ大過失を犯すに至り、其決心の動搖は全く部下の信頼心を失なつて仕舞ふに至るは目前である。此樣な重大なる關係がある所からして川村元帥も、其孤立援なき分水嶺に進出するの危險は知つて居たが、一方に於て敵の兩兵團の側背に出るといふ利益のあるのと、一度下した命令を取消して志氣を沮ばみ自己の威信を墜すの極めて不利なるを知つて、ここに始めて友軍狀況の變化に關係せずして前命令の

決行を決斷したのであつて、此の川村將軍の處置は實に立派である健氣である、評者は其極めて至當にして時機に適應したる申分のないやり方を稱賛するに躊躇せぬ。『戰鬪ノ效果ハ一ニ懸リテ其當否ニアルモノトス』と操典のいふたのは此樣な場合の決心を指したのである。此の師團長の立派にして堅固なる決心が動かなんだ爲めに、此分水嶺の戰鬪は極めて巧妙に實行せられたのであつて、此の友軍狀況變化に對して聊かも躊躇逡巡せずして前命令を決行したる川村將軍の勇氣は、實に天晴れ比類まれなる智將の手本勇將の模範であると評者は信ずるのである。

此命令の研究と其命令を友軍の都合の爲めに變ぜざりし川村元帥の處置に就ては、最早研究するの餘地を殘さぬと考へるから、これからそろ〳〵此の命令の實行に就て研究を始めることにするが。二十五日には鎌田支隊と丸井支隊が運動をしたばかりであるから、別に大した評論の試み方もない樣であるが。先に評者が其不當を鳴らした如く、鎌田支隊を遲く出發せしめた爲め

に二十五日夜には、同支隊は卜家堡子附近に宿營することになつて仕舞て。魏家大嶺から小魏屯の間迄前進したる丸井支隊は、全然其横腹を一里内外の大高家堡子に居る敵の前にさらけ出して、平氣の平左衛門て宿營をしたに至つては、其勇氣は頗ぶる稱するに足る樣なものの、實に無謀千萬なるやり方てあつて危險至極てある。求めてあぶないことをやるといはれても一言の申譯は立つまいと評者は思ふ。せめて鎌田支隊の先頭を深河子か東瓜川位まて進めて置いたならば、大分に此の二十五日の夜に於ける丸井支隊の位置は安全になるのてある。それを何等の必要もないのに鎌田支隊を卜家堡子に止めて宿營させて、態々丸井支隊の右側を敵前に暴露したのは評者は其理由を知るに苦しまざるを得ぬ。幸にして敵が何等のいたづらも細工もせなんだからよい樣なものの、若しも彼が此の夜此の支隊の右側に迫つたとしたならば、此の川村師團の分水嶺攻擊計畫は、其一點て全計畫に大障碍を及ぼすに至り、豫定の如く此計畫を實行し難くなるのはいふ迄もあるまい。てあるから此の二十五日に於ける丸井支隊と鎌田支隊の行動の前後に付ては、評者はどこと迄も其至當てないといふことを主張するに憚からぬのてある。

二十六日になると師團長は依然總豫備隊と共に岫巖に駐まつて居だが、諸支隊は悉皆二十四日の命令に依つて運動を始めて、分水嶺の攻擊準備を著々として進捗せしめた。今から戰史記述の順序によつて此の實施を評論することにし樣と思ふが、研究の都合もよいので先づ第一に淺田支隊の方から其研究の歩を進めることにし樣。

淺田支隊長は近衛騎兵聯隊長加瀨中佐に、歩兵二中隊、騎兵一中隊餘を指揮せしめて、それを岫巖の東北約二里にある所の興隆溝附近に派遣して。これをして彼の硝子河の上流の黄花甸の方向に對して、師團の右側背を掩護せしめる樣に配備をさせ。自から其殘餘の全支隊を率ゐて此日始めて北進を開き、橋家堡子北方高地の敵を驅逐するを手始めとして、進んて王家堡子を占領せんとして右の如き計畫をしたのてあつた。

一、歩兵一中隊、騎兵一小隊をして午前三時三十分東瓜林子附近を占領せしめ支隊の行動を祕匿せしむ

二、山田大佐忠三郎に歩兵二大隊、騎兵一小隊、砲兵二中隊、工兵一中隊を附して前衛とし午前七時五道河北方三叉路を出發し先づ東瓜林子に向つて前進せしむ

三、有吉少佐に歩兵一大隊、騎兵一小隊を率ゐしめて右側衛とし前兵の後尾に續行し二道河子より分進包家堡子を經て王家嶺に向ひ前進せしむ

四、支隊の殘餘は本隊となり午前五時三十分洋河の線を出發して前衛に續行す

此計畫は概して評者も同意である、何人がやつても此方法の外にはさして面白いやり方はあるまい。就中歩兵第一聯隊第七中隊と騎兵一小隊を夜半に東瓜林子に進めて、支隊が此日行動を起すといふことを過早に敵に知らさぬ樣に、我が計畫を祕匿するの方法を講じたのは評者は頗ぶる同意である。これは前衛司令官の考から出たかはた又淺田少將が命令したかは知れぬけれども、えて此樣な場合には志氣興奮の結果として、我が運動を祕するといふ樣な周密なる注意が缺け易すいものである。もし此の注意が缺けて敵が我が前進路に我に近く進出して來て居た場合には、それがほんの少數なる歩兵か又は騎兵の斥候位に過ぎぬものであつても。直ちに我が支隊の兵力や行動を偵知してこれを其本隊に急報するから、敵は忽ちこれに對する應戰の準備をすることになつて、攻擊軍の爲めには非常な不利になるのである。が此の支隊はここに注意が行き届いた爲めに、全く敵に此の東瓜林子以南の我支隊の有樣を、聊かも窺知し得せしめなんだので、頗ぶる此日の前衛の戰鬪に利益することが多かつた。これは評者の大に贊成する所であつて、常に必ず此樣な處置をせよといふのでは決してないが、此場合に於ける此處置は頗ぶる時宜に適して居ると評者は信ずる。

淺田支隊に先行して其行動を祕するに任じたる第七中隊は、其主力を以て

東瓜林子東北標高四一二の高地を占領し、其一小隊を分つて半家溝北方の高地を守らせたが。此中隊は本道を挾んで展望自在なる兩高地を占めたのであるから、少し此の兩隊の距離は遠過ぎたが、併し任務はこれで確かに遂行し得られる。からして此中隊の處置も先づ〳〵適當として置かふ。然るに午前六時過になると敵の歩、騎兵各一中隊宛程が、陳家溝の方から半家溝北方を占めたる小隊の左側に向つて前進して來たので。それに對して射擊を猛烈に行ふたる後、此小隊は大荒勾北方高地に退却したが、此小隊の退却は少しく時機が早過ぎたと思ふ。何れは後方から前衞の進んで來るのは目前のことであるから、多少の危險は冒しても此地に踏み止まつて、後方諸隊の行動を少しも敵に知らさぬ樣にするが必要である。然るに敵が遙かに陳家溝の方から其左側に向ふのを見て、遙早くも退却したのは除りに其動作が輕率である。彼が吳家溝附近まで近迫して來た場合、若し前衞が後方から增援し來らなんだならば、其時に至つて始めて退却しても遲くはあるまい。であるから此の小

隊の退却は確かに少しく早きに失したと評者は思ふ。

山田大佐は其第二大隊長少佐大庭景一に第六、第八兩中隊及び工兵一中隊を率ゐしめて、これを前兵として豫定の如く出發して柝木城街道を前進したが。前兵長たる大庭少佐は出發早々に於て、前に出て居た第七中隊の一小隊の退却の報を得て、これを救援せんとして東瓜林子に向つて急行して。午前九時三十分に先に第七中隊の一小隊が棄てて退却せし、半家溝北方高地を第八中隊をして占領せしめて敵と對戰し、尋で更に其左方高地に第六中隊を增加したが、此の大庭少佐の處置は適當であると自分は思ふ。此の大庭少佐の歩兵二中隊は前兵である、其後方には近く前衞本隊が跟隨して來つつあるのである。然るに此の前兵の二中隊が不注意にして、本道附近を占領したとしたならば、後方から來る前衞本隊は其諸隊を展開するに當つて、前兵の左右兩方へ分割して增加せねばならぬことになる、左すれば隊伍の錯亂を來すはいふ迄もあるまい。此の前兵散開の急場に於て大庭少佐は將來の大不便となる行

動を避けることに氣が著いたので、先づ第一に其第八中隊を本道左方の半家溝の北方高地に散開し、更に第六中隊を其左方に增加して、其正面を開放して前衞本隊の展開を容易ならしめた。此の前兵長の注意は頗ぶる評者の同意する所であつて、前兵長に任ぜられたるものは如何に戰場多忙の間に於ても、常に此種の注意を缺いてはならぬのである。然るに敵は我が此の大庭前兵の行動を見ると共に、激しく戰を交へることをなさずして陳家溝北方高地へ引きあげて仕舞つた。丁度此時標高四一二の高地に踏み止まつて居た第七中隊の主力の方へは、前衞本隊中の第五中隊が增加して、橋家堡子東端に出て居た少數なる敵に對し、猛烈なる射擊を以てこれを擊退し。それと其前後して前衞本隊は大荒勾の東北側に開進を始めんとして居たのである。

前衞司令官山田大佐が東瓜林子附近に出て敵情を偵察して見ると、敵は其兵力約略一千內外であつて、橋家堡子北方高地から陳家溝北方高地に亘つて陣地を占領して居て、橋家隈子にも若干の敵が居る樣である。此有樣を見た山田大佐は獨力を以て之を擊退せんと決心して、直ちに其砲兵に半家溝東方と東瓜林子南方の兩高地に、本道を挾んで布陣すべく命令を下して。それと同時に第一大隊の三中隊を以て正面より橋家堡子北方高地の敵を攻擊させ、前兵たりし大庭大隊の第六、第八中隊をして陳家溝の敵を攻擊せしめて。他の第五、第七兩中隊を以て橋家隈子の方から、敵の退路を脅威せしむる如く其前衞を部署したのであつた。而して彼れ山田大佐自身は步兵第一中隊と工兵一中隊とを控置して、これを東瓜林子に向つて前進せしめたが、此の攻擊の部署は自分は極めて同意である。即ち前兵があけて置いてくれた正面へは、前衞本隊の主力たる第一大隊を散開し、前兵は其左翼に連繫して敵を攻擊し、更に其右翼には第五、第七の兩中隊を散開して、敵の右側に向つて前進して彼の退路を脅威せしめたが。若し此の敵が頑强に此所で抵抗した場合には、此の退路脅威に出かけた第五、第七兩中隊は、其右方餘りに遠からざる位置を、王家嶺に向つて前進しつつある右側衞と連絡して、全く敵の退路に向つて突

出することが出來るので。敵は嫌やでも應でも此陣地に永く停止することの出來ぬ樣にし向けたのは、これ確かに山田大佐の攻擊部署が最も其宜しきに適して居た證據であつて、此のやり方は評者は全然同意であるといふに躊躇せぬ。

前衞の攻擊部署が頗ぶる適當であつたので、砲兵の砲擊が開始されて我歩兵の第一線が前進を始めると相前後して、敵はさしたる抗戰をもなさずして忽ちにして退却して仕舞たので。山田大佐の前衞は進んで橋家堡子北方高地から大偏嶺附近の高地を占領して、今や必死の駈歩で小偏嶺を退却する敵に向つて猛烈なる追擊射擊をなし。砲兵第十聯隊の第一中隊即ち本道左側高地に布列した砲兵は、逸早くも大偏嶺東側高地に陣地を變換し、機敏なる砲擊を行ふて敵の退却を潰亂せしめたのは劈頭第一極めて壯快至極であつた。そこで敵は必死と退却を繼續して王家堡子附近を足だまりとして、そこで一防戰やるべき考案であつたが王家堡子へ到著して見ると。其左側背に迫り得べ